小笠原島紀事　廿九　三十一

和書門
類 三七七四號
二函
一架
三三冊

内閣文庫
和書
類 三七七四號
三三冊
七三函一四架

内閣文庫
番號 和 3774
冊數 33（31）
函號 173 179

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x·rite
国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

無人島談話

小笠原島記事　廿九

明治十五年謄寫

小笠原島紀事巻之二十九

目録

○無人島談話

内務省

無人島談話目次

上巻

放洋始終

下巻

地形　方位

氣候　物産

洞穴　服飾

食料　器材

僉名

附録

内務省

土州船漂落紀聞　大坂船漂落紀聞

遠州船漂落紀事　江戸船漂落紀事

無人島談話上巻　薩州侍醫曽槃識

放洋始終

日向のくに諸縣の内白り志布志浦なる運船に
國處之榮右衛門船長となり運貫をとりつゝに
あきを業となしける 帆幅五端住吉丸ト号す船主は中山屋三右衛門と云
時に寛正元年己酉の歳十月檝師壹人水主三人
都て四人を雇ひかしとり守助水主八五郎惣右衛門善助こに同郷志布志の者
なり胡麻鯀魚の裝苞を載同月二十五日風便をう
なるい僉妻子兄弟親族と相與に盞を屬しかり
そめの別を决し順風に飄よるかた志らぬ浪の

ろへに押漕いゝれる此日天象澄爽々にしてつねにくるめの海なきが心にかゝる隈もなし但老境の守助聊病ありて氣色つねならぬゆゑにふ老をいとひ高議して船を福嶋にとゞへ繋守助を故村へ還しまゐらす代として甚右衛門をやとひける 福島ハ即ち日向の地にして志布志をさるおと三里秋月領なり甚右衛門ハ今所のなり 今町のもの 仝二十八日の朝風に開帆し此日内海の奥に碇宿鵜戸の詞を拝まずして 内海又日向の地にて飫肥領なり 鵜戸の社なうかや葺不合尊を齋といへり 翌日微風に競ふ。なゝにしれに日向の大灘を夢の枕に細島のみなとへいたる

細島もまた日向の地にして我國のおほみなとなり志布志をさるおふよそ四十里なり あゝふたゝびかく風便をまち晨炊晩爨の水をとりまでに西風をえて開船し飛鳥のかけるごとし十一月二日に備中のしに玉島にいたる 玉島ハ備後國鞆のみなとより東五里澪曲のうちにありて官領なりといふ蓋所の港里なるへし今ある、かの日本輿地図行程記および國華萬葉記等を閲るにその名をのせず 出貨收帖運貫のみなとに後てまたいさゝか私貨をひさぎまゝ綿花の裝苞を載歸帆の期も程みえしにいかてか惣右衛門善助とえに病にかゝりて動作つねならざれを幸ひに淹留してありける秋月

の童次郎をやとひ仝月十五日に其地の高戸を
立に来歳の交易を約し関船を祝て此日玉島の
環曲をいてけれは倫後の浦わたりより風はし
し晴移りかはるはへに鞆北をさして停泊し
て翌日ひさしいつる頃纜を解て安藝のくにま
く心をくだしけるにまた回風あしくかると
といふ所に落帆す かるとは安藝の地にしてさ かしの村落ありといへり
こに累日天象をうかゞひ漸順風徐にきたり頓
にふねを出し西風ふき日ひ周防なる上の関の
あなたをまちうちに風まさかえりてにあひ

といふ所に碇泊 かなひに上の関の東十里あま りにありつゞりなる島にとく
なかし海浪風濤をさのく所なおかゝにましく日を
り是周防の属島なりといふ
うつしぬれは時に風瓢然として来り直に船首を
まはしいてはるかにたど二十日阿まりの内なき
霄の空なれと常にきなれし連山畳峰をさり雲
霧夜をこえて細嶋の港にいたりぬ是此日年
十二月二十六日なりいつしかにふる人の家の
さとうもやし日のうつに催をえてあくいる人
のえをとありに心いさえてはきれるかやむ
てかに二十八日の日天象もあらましに晩なりし

かくて東風に呉帆して　あの浦さし日向の灘を越
ゆき人の額にかゝる大洋にいでしかとやゝて
風も東北にかはり海気朦々として　しろく空の
刻ありに淅瀝(セキレキ)として雨来實の勢とかはりし
俄西風たけしく起りて霹靂のごとく百十里をゆく
り放漾(ハナタレ)せられ西北のかたをのぞむに日向の山
ゝ峰々も蒙氣(モウキ)のうちに幽かなり　貪慳(ミナガウゼン)として
せん所なく逆(ギャク)風に漂流まゝ凡に称のことをに毎しまひ流るゝしま
とをつかせもし　あそいふにひさしら、に船(フナ)弥(タマ)潮(ハヤ)
りといふといゝし
神(ズシ)をいのるたかり　なり鳥羽(ウバ)玉の枝をたてにあ

しるといえと雨猶頻(シキリ)にして西風はよはえけ
しゝ駭浪(ガイロウ)の音高く煙波の色をみ〳〵眉を斂(ヨセ)て四
方を顧るに渺茫(ビョウバウ)として方向をさらしならず此夜
まく星光なくして船蕩(タラ)々として方をまよふ驚濤(キャウトウ)
喧浪(オイロウ)に揺震雷にひとしく〳〵に蕩漾(ウゴキ)たちまち蹴蓬(シトマ)
に臥(フシ)神(シン)號(ゴウ)佛(ブツ)名(ミャウ)をとなへ暁をまつに風揺勵(ハゲシ)しく
潮も湍急にして岩勢山を抜くかとし午の刻と
おほしく此潮(シホ)翻(ザシ)の所にさかり潮のみち、うみ所を弁ぬの詞に
あるひは是をしほ舵(カジ)はさみ楫(カモ)もにわ渦も船中
ざわとなどいひ
に浸(モレ)いりけなく周章(アワテ)してこれを防衛して抄のと

ころをかくむるなとをえたりといへとかくる
大洋風波のうちにありて要具を損しいたく土
地へよるべきたよりなしかちのえゝ柁を舟子の
こと〻にあるひとまり
えと云これ洋船食客に思ふやうなる封域こゝに
分一の要所あり
窮れ堂とて装苞を擲牙檣を伐髻を薙ありし同
のやし回のうちに投し唯神是抗誓ひ勢州天照大神讃州金毘
羅ありといつり拙に金毘羅てふ者を実に崇め
鳥尊なるに習合の迹うつりに天狗の所化となし
しけるなと寒心落膽白汗淋漓として灑のかさ
りふ御まし
へ一房の蚤號をなかし舳を先にして風雨の中
にたゝよひける難船抱なきときハ危さきはく多
水つなをなかし碇を先かし

て流るゝとありなくせ
されバ船覆没きといふ夜の向くる頃衡風をち
く雨のうち降けれど漸々たる大津なれは濤瀾揺
盪として辛楚艱労いふべくもあらず神を拝し請
命をいのまかくのごとく夜は日をまつ頃いつ
しかに暦日をもしらなひけりある日ゆ日明朗の
時ありて天を瞻目するに一班の孤嶋なくうち
寄く羅針に南北を測りまくく日の出没を見て東西
をしるといへども更より経緯の高低をよひ推
歩窮度に疎ければ何のかたとも左右とをしるは
なしめ西風にふきなされければ坦東方にありと

思ひけり。かくて潮汐にまかせ島もかよえぬ渺
漫のうつに。空しく星光をうつして。きみをしのき
ける。も。を也二十日ばかりも月わたるに。糧は遂に尽
て。せんかたなく潮水を酒樽に盛て時々渇を癒
拷腹をなのひ。神明の感応をまつに。ありふかき
りなる時正月二十八日か九日とおひ日といへりあしたより。潮気
静にして空濶まろり。一片の繊雲なく。歴瞭うち
に。煙波の末。ひとつのをしまあり。わ近たり。船をり三
里計隔てこり。といへりさふ力をえて。乃に島々。神の影
めとまて。小船首を其方位にむけ。あやしき帆を

はらゝ。め。行程に。やゝて岩木の色もしるく見
にならて。島をさること一里半をかりをいへりをしまの山の。お
れろしの起きて。船わいりもよるかさなし。貪お
もふに。今此際をうしなえゝ、此世のかきりなら
んとて。志ちやゝに錨を施まに瀬ふかく抓と、
まろほ。ほに三彦をつなき。てれ諸ほをいへり島にいよしへざち。
日に日もれなし入て。うえたまの暗にまとひ。憂
心冲々として暁をまちまひけるに船え遠く隔
とつといへと。もとの方位に何り。島をさること三里阿まりに
りといへりなに高議して。神籤をつくり。一は本船に

なりて。自然を待しきり。一ハ御船にうつりて孤
島にのほるへきりとなるし。誠心誠意にふし拝
義を要なかり。脚船のくしをえらり。船長揚ると
していさや御船をおろせといひれれた。となし
疲労をこまれて。急ちまな灘瀬の上に敖游せし時
に船長廣村章歸の小幟と津口鎮衛の文券をそ
りいあし。八五郎にわあし。假令身ハ溺るとも佩
くなりあふことなりれといひれれたりことの
ゆくに守善助と與に御船にうつり。次に船長船
神を載てうつりうちつぎさなとりしに船

具匠器を携へつゝ。本船をうち捨て星をいさゝ
きをしし海の方をさして漕行なとるに。丑の斜と思
ひしおろに浪いとたかき。島のきしに下行をさ
ること二町斗りといへり。ありつきを待けるうち。まてに崖
上より散髪裸體の人或ハ鋭嘴をききこえるもの六
七人立なるひ。喧叫の聲錯りとして寂ぞべろう
ば。其風貌骨相家くにの人になりけれ。あやし詑様
なり。其さしを望むにかゝるあり潮なれた。磯石
陸從族業とこして復倚りおとしこれせのつ年の
人住へき所にありけれ。船長いふにかくあれこゝな

る島は。たゞなき国にやなりけん。あれまであやし
きいのちをわたりくりし数家にいたり。彼等の為に
浪死せんも。いとえりなしとて。洋のかたへ船首(ヘサキ)
をむけていでけるに。人声愈(イヨイヨ)高(タカ)く。雲井にひゞき
けれども家国の詞(コトバ)風(ナマリ)にきこゆる。今いふに是かならず
ぬ他(ヒト)の国にあらじとて。頻(シキリ)に船をまそ(?)しけれよ
まれど。潮の虎磯(イソニツキ)にひるがへり。海嘯(ツナミ)のごとし。時に
八五郎逃先(ドウカヂ)かけて。挽纜(テナハ)を持て一丈余の岸へ
投られたる。島人是をとり。八五郎を牽揚ける。即ち
人に為し。あれ何の国と問ければ。何の国といふ

ことばは言語と。家等が皆日本(ヤマト)のものなりしかば。
薩摩(サツマ)にこゝに漂到(ヘウタウ)し。累年かへるに由なく。日夜
日本にかへらん事をねがひ居たる。待侘ける身にし
あれば。今この船をみて。悦かぎりなしといひけ
り。又其心ばへを想ふるに。直なる様なれば。持たる
るてなへを脚船にほどこし。彼人もろとも牽よ
せ。五人のものともかくるし。船具近器を携のぼ
りける。其唐(カラ)船(フネ)は頻到(シバシバ)の為に。暗礁(アンセウ)(カクレイハ)に遮覚(?)に破
かゝりありける人。即舵(カヂ)にて。海際(ナハ)にいたり。其
船材を繋(ツナギ)とめ。後崖上にさゝえ。是をさらしてあ

りける漂人と与奥のまじはりをなし。互に若干の悲をかたらひける。此時土佐の国の漂人大坂舟の国の拾人、都て拾二人なり、拙に大坂舟の国のもの、これしめこゝにいたりし時、二三日を過て、食を求と先人さめに、阻難のみちをよぢ、山上にのぼり崖下を望めば、あやしき姿の人、ひとりたゝずみたるを見て、これを多とり山をくだり、其人を見るに、眼睛あをく髪をかぶり、鳥羽ひとつを衣とし、れにかえろしく覚え、暫くとゞまりけるに其人声をかけ、なつかしくのあなを云是長平なり、或説に涙をきたりといへり拙に是綿布の涙にぬれる傍にたゝを涙ろといへる是涙ろとぼろと潸潸の音詞して、あやまる。つねに、茅を焚 土佐の国のこゝに漂して二年たかりのうち、火食なり。せれ大坂船の火打をもつさへ来て天然をよりはじめて火食せもいつりの異草を嘗(ナメ)佐鳥(クワイ)を吹(ソラニ)、月の盈縮(エイシク)と日の登(イデ)

莫(ボ)をこえて立月(タツキ)をうつろふいま浪ならを誰といはん。暮(イリ)ことして太古のむさち猶鳥(ミン)として猶あり。僉(ミナ)何のしふ空云王をあとられば、かしそゝり便なき世白しきにに、空く日日をこさり、涙なからに氛におきなひとふにつふ庵の夢のしめくり。世ちにかゝを思ひし、思ひのゝ角丸海にふちふさかり草坐(ソウザ)の閑(ヒマ)もあらず。一歎(タン)の食も日からん。さえあれど、浅ましき身のうへに去のひ難く。寂寞(セキバク)の濱(ヒン)に釣(ツリ)し荒涼(クワウリヤウ)の山に捕(トリ)て天年(テンネン)をを兎ちつねに佛氷の妙感を頼斗なり。偶(タマタマ)嵩峭(セウ)を攀(ヨヂ)嶮崖(ガイ)

を滙されき。敗錨の残剰あり。又一圓の鐵鏽あり。
思ふに敗鍋の痕あり。まゝ一の坎中をうるに、枯
骨二叢あり。一叢は函壊て露はり。一叢は白彊の
まゝあり。棲に。口併にはその一はまゝ木牌二枚
別の孔にありといふ
ありともに文字ありといへど、敗壊湮滅して讀
めざりし。大坂船の忠八。此を考索するに。一は遠州
船といへり。家内詳ならず。一は江戸塩町宮本
善八船一艘。元文三年正月漂着といへり。後栄
右衛門これをうるよ。猶かくのかしと云 今按に、享保三
年、遠州荒井筒山五兵衛船、一艘、十七人のり、この
島に漂着、又元文四年正月、江戸堀江町

本善八船一艘、十七人のり漂着す、遠州のものを
便船して、同年六月帰国せり。事詳に真口書にく
はしくみえり、是によりてみるに、三年と此真木牌に志
讀、塩町とよみたるは皆これ
るしたる人は、務につまびらかならず。於に真石
碑を為し、古佛と刻して。収葬せし余家乃のたてしか
しせあらんと悲嘆うちに猶もなく大坂船の五
兵衛は病に死せり。此時は寛政元年六月と由日
四家四十餘といふ、江戸を焼
て、白骨を葬、石碑を建、家月の里俗名を刻、まゝ多
に江骨を收て胡多に一濫の形をほと出し、後八
又急へ もち出り 哉もなくまゝ無右衛門も日ゝに積薪を
生し。後復滿儎停の廠とあり若干のりなしこを
のこし。穴し藻塩のけふまとつもに消うせかれ

り。此時まで日本六月廿九日とおもひ[illegible]年なる三十六、葬式は即五兵衛とおなじ
爲めしの如きハ、生還の想なきにあらし。晴た
る日ハ。阜崗の上へに攀て。四方を眺望し。家国の
物語し通ひて。此嶋によせんとて。皆に積茅を
設。四ヶ所の備となし凡里。かくして返しまでに二週
を物見と。絶て一班の帆影をミれ。まれにミるも
のハ鯨魚の脊出没しぬるひハ。飛龍雲騰の象あ
り。岸より一二里あるひハ三里ばかりおきにあ
りとしあ、に一二なまさなきとしもありと
いへまさなるひハ。鰐魚及牡蠣をとる、きミるの
り
ミ。大魚海上に游泳する時ハ。あるひハ水もりに海
水旋騰して。多みをもなさいとふ[illegible]のかくつ

以に居りつまく所へ没せり、これ如くる世にと
鰐魚のとる所とおもひと以らう、
ある所に没落して再日本へかへるよしなきに
とを。ひそかに打より嘆息せるうちに。まづ忠八も
病に死せり。此時ハ寛政四年の六月頃と覚白家
三十葬式ハ五兵衛の時の如くある
説か、忠八五兵衛ともに、日頃船以食補を志向り。
さうさるおやに死といふ
ひとり残のこにありける。家事も以つゝかいこしに
打たらつきつるをに追ハ。假令海中に浪死せるとも。
せし如く無命ちなれハ。一葉の船もうちのかこ。天運
にまかせ。人のあととみるてふくめしるつしとて。
しなし心を定め世。船隻修補のことを企てけり。幸

に箱館の士北條船のことに心ありて近器を携へるに塩田助に就て、これよりさきて漂到の諸國をひろひ、船材の古鐵をもちて、帆布の料は衆の着服をあつめ縫ひつとて、皆一衣にをさめ行衣は大名の毛布をとりて、風帆をしのぎ吹き送り心をつくしたるも、潮汐によりくる物なれば、ゑこゑろとなし、わらふに尚いまだ近器に乏し且鐵釘を錬鍛するに、鍛冶中一の風箱なし。按に和名抄に、俗にいふ鍛冶あやまりなり。これ鍛冶を鍛冶といふと、世流習ひてかくさし、八五郎が持て来る造法をなる、といへと、当時善助か病に心をいため、常に其側をはなれず、敬くしつくらく製に暁なし。せんかたなく甚だ術つくして其法を、具に注さ、これは遂に風箱一坐をつくりえたり。時に善助は日ごろに性燥甚しく、前に徽毒を発し積癖心に衝て、甚なりし其略のなりとなりぬ。此時寛政五年の七月二十九日とおもへ家三十五、菩戒まさに其会術り時と西なし余身にしみて傷まとひにたりある故洋のかくより。つねかみなきぬ。良材のなきよひきし岸によりたれは。ここに来て鏡とりあけたるに船底となさしき。樟の材なり。此風箱をつくり、凡半年を過て、これをとりえたりと

いふ、材の長四尋幅二丈ありといへりこ
のころふ船の散木となりくさものなりまし
とまとひなりし間まなりと於、後洋船をつ
くるにいたり、此找に網船の志き、を避て五尋
なまりとなりといふ、樹に栽植り叢業に云、和の葉
一帯ハ堆平底をもちふへし、洋過ハ異底をもち
ふと、多くの船も、まくめくのあとし時にはるひハ異木の皮を剝
て。あまにるくらし蠣殼を焼て灰となし、其修補の
料材ハ多くに心をもちふ。五七ハもとより鑪
工のことに心ありて。其両石を鐵砧となし。鉄斧
を鉄鎚に代鍊鑪の工をはしめ。利用の匠器を製
渫流の木梟をとり、次に鉄釘をつくられる、其器
焼く廣となれとも、
材利用ス。いまさらとしへそあたうれとい、

とも。修補の時ハ、そのすら舟の助もありなん
そそくふともにあらりて茅のむしろを以て洋
船の形をつくり。是にてうしして艨艟船一隻をつ
くられると。長三丈斗諸材織もろ。當にいまくちたる
舟と。舟艤をやり良辰を選地方を見らぬ潮汐
を視修船のことをえしめけう。其修補の地。候吏
曲直ひとしからぬ故に修補のかたたら。其材を
鑿し海に艤に世界とてれを心に二丈を貫山海
に良をとる時なし。兵器何有の人に插くとして。
光陰をつくるもまくさ何の因縁あることをある

ば。凡三年にして。船も船具もみな朽ち。路もまく
漸平更になせり。時に船中の盛水桶をもふれん
とせしに。外箍の料角しくなし。食粮をもちえて
考るに。更に不思なし。其比ハ寄に帆にちかひ、牙檣をえし時なりとい
ふ一日海氣晴て潮も静なりけるに。青く見ゆる外
等角によひきよりけり、食粮揚して。手際にくく
りと見えたり。在船中九十年の久きに青竹の流
れきよることなし、其比二三度
あり見来く、五六本を即これを箍となし。盛に桶
忽乃其まゝつふ
四辺をつくり。まさく牙檣を合接せる箍となせり。
枕四本を接し四方の一尺のたし、絶修船の事を
をしうをつくるといへり

高議してより。衆既にむ角ひ免くりて。遂に完船
修補のことをとり。由て此るる奥の乾脂を装
苞となし。また雨降の補を以のまゝ。衣類をたくも
ひける。雨降の補ハ大山の補新なり。これ人智るのかりしき。
自然の妙。かくのかにして。生還の期も程とくれ
まれり。ここに高議して天明以来。こ船漂流の始終と。
衣食居住着用。西つ洋船修補のことを木牌に志
るし。また暮船風災水燧をよひ鍋一口。枕のし
かてく函中に納め皆上記を書。洞穴の中に旗標識
を建路来漂客の助となれのミ。こと皆を付ま。凡

便もよろしき比なれば。いざや船をうかめむと
て。羅鍼をつくり。一は西方。一は東方。一は西北の
方なり。此二作をなすに象しきたまの珠に誓を
めぐらし。船首礼拝して鍼を決するに。西北の方
をね夏至の頃は炎暑盛にして。南風吹しく時なれ
ば。あるひは六月といひ。あるひは五月
といひ。あるひは七月といひ。今やをそしと。天象
にも一定のおきてなし
静に南風さだまるをまちあひ。終をきり鷙鳥と
なし笑一同に羅鍼の感涙を講しけるに百木の
船をうち免。雑色の帆を挙。掟を西北の偶にとり。
めぐるあやしき海水におどろき。船を頼み勝る

なる天涯をさしてはしまれど。寥然として。
鳥の樊をいづるがごとく。雲の岫をはなるがごと
く。心體悠々として歴瞭たるに。午の時と思ひ
し頃。八里程をさるゝと見しに。かのおしまは浪
方かくれにうせにけり。海も八隅とまにまと接
しぐもとどり羅針もなく。かけたる帆とぞ見てなる
職を便に。もはや王なる月夜をこめて。同風にまし
まれるうち降しきる雨にふけれど海濤のあふに
あふとも。凡四五日あれぞあれど。海静にして。ふ跡
甚なく。東南を過。日あるを経て。四になくれに。艫の

かこになさり。一嶋をえたり。これを的識(メアテ)となし
て舟程に。あくる日の未と思ひし頃。右嶋の岸に。
木杭(くかう)を流しければ。忽ちの間に。嶋人うちよるか
いるにゆてきそふる木の船に。雑色の帆にかけぬ。島
めしきともおもひけん人指遂(ツイ)に船をきしに寄よ
せけり。即座(サショ)所船主および志うしのよ志をし
先し。右岸に繋(つなぎ)つゝ島人既に船を陸にひき付
けり。ある浪あらし、大石にさゝきりふれのとり
やふれんことをいとひてなり
を摘つけ島の名をとひけるにおのおの青ヶ嶋
てふなにて。八丈嶋の南。三十五里に隔り。携に、海
嶋風土
記には三十里、島居某余欽然(キンゼン)として。我佛をふし
ヶ説には、十八里といふ
拝(オガ)み涙ながらに。茱月をたつ程なるに。是歳寛政の
九年なり。此ふか六月十三日なりといへり。此時
めて、六月八日に、あの嶋をいでて嶋吏(ヤクニン)と申しき
しおとを志るといへり
其の求あらましに漂落の始末を記事(キジ)談(ダン)嶋人と
そ王に。嶮崖(ケンガイ)断壁(ダンヘキ)の層梯(ソウテイ)を攀(ヨヂ)上る更の形にゆく
り。胥隷(シヨクレイ)の家に僑寓(キヤウグウ)し猶詳(ツマビラカ)にきゝしのちをを
云くれるに。嶋吏より晨夕(シンセキ)の米糧を以るなり。芋魁芋樊あし
さ芋、つえふきなどと此ものに来て。漂落以来。それしめ
の類なりといふ
て相思(ソウシ)の煙を吐しことをなすり。相嫡しに嶋人と

ふりひゝしかバ。此嶋の名称をたつぬるに。往昔火
鉢沸湧して。村落一時に湮没し。これより嶋民居
を八丈嶋へうつせり。按に。此嶋ハ天明五年に火を発せしなど。井上貞弟が四
嶋記に見えたり。其後今をさる事四年にして。八丈よ
り男子九人をうつし。廃田をおこせしに。まさに其来
田蔵穀を害し。粮食をたちけれど。今に八丈嶋よ
り運便なし。穀種をわたせ。今ハ但其糧のミあり。居
石甘藷僅に蕃殖せんとすれと。未年の多忙に。其
種ハ戸口に分配せしかバ。其うち又。藷糧にあ
しとなる。又この嶋に産しあり。てらひし物産を

ぜるに。名目しるし此嶋にわたりて。其名称をさだむる
ものなり。按に青ヶ嶋の地勢風俗ハ。詳に海嶋略
風土誌に記したり。故にこゝに略す。就く
こゝろを知りける如く。八丈嶋へ送りし船
のとゝのふに。嶋吏のもとに。今更に通船をある
ましとて。其の西木の船をおたしめ。按針の手の
如人を副へ。のこ二人なりと云。同年七月八日。辰之
午に発帆して。順風にまかせ。同日未の刻と思ふ
ころに。八丈嶋大賀郷へ。八重根のみなとに至しかバ。い
つしかる早くも。遠く望てつりくるにや。地役の
のたくひまでに。海浜にあつまれり。按針の手の。

即総官の如き人に就て其概略を申されき。登岸のときは。官亭に入れ置り。地官は列菊地恒七、菊地左平次、奥山左衆、根部源五郎、属隷は其名を忘れし。史（或作吏）なりといふ
書を録しまた同眼以て。載来の置着雑具完船を詳録して。其ふは忘れうく地官に以ざしたり。

但帆布帆を請ひ。僑居に就て各一襲の衣を製す。貽田ふの給食は。天威によりて労なし。米麦二品を得る、こつすりあしくぞ。岩菜のやうなるものを煮ふ和し。す田となしうふといふ、岩菜の採なるものいまふ伴なうは、たしめ八重根にいさりし時、精米を食ひけるに、無に、おとなるものをてらふに似てこの時、咏思うこきみしく、時に属隷に請ひ。携来疵痛を遇といへり、

斃者の骨を宗福寺に収葬し、各其郷里俗名、および水死の歳月を刻。石碑を建しさ、且誦経の施を頼まれるとなり。僑居にをつきて同侶かたるしありしこと。ことりちはあるしおとも田るさし。（元ノマヽ）
又つ孫に陶郷の心施殊と。官に公にかゝる身にしあれども。頻々須拵に地官の命をまちあれるに経歳より上船の命何りて。同年九月四日に官船丸（小）乗。酉の刻をもつて開船。船長及吏共に十人菊地左平次同船。漂客十四人都て弐十五人なり。翌五日さしいる比。東南の風をれしく。船川すてゝ海灣の南に向たり雨以うふ降

く船は木葉の風に翻るが如く揺蕩す衆みな雷同し
て神に誓。衛らあらゆる所をしのぎ夜既にあく
れば。海気穏にして。翌日風東南の方より起り
たり。船はきほひてはしり出る中にこれより前
のたしきいと暗成の雲たちわたりに。東南の外ことに
はなはだしく驟雨驚濤の勢大盛にしてきわなる。
固まるへすり。口遊へもあり。心もとなき。非ずと
ろき。時に船長邪識を決し遂に帆を落し只船を
角にかりに過分ありて流る固と共に。夜の雲の明を
り。衛風静にして雨はれ。星光きらめきけり。雨

風起日ひて起け見る僅に布帆を揚東の方に
はしるに一嶋あり。此豆州三宅嶋のうち側に小
嶋あり。豆州新嶋の三宅嶋なりと云 即東南に碇宿あり
たかに島の嶋のきしにとまり此夜こゝに停泊
す。あくる七日の朝。南風を得て中ふかで伊豆の
しも河嶋子あくる同十七日にこゝをいでゝ此
夜相模のくに浦賀に下町。同十八日浦賀の鎮衛
に船をとゞめき官府の文券を検口を閲事讓りて
同十九日嶋に二にあり風候をまち。同廿日子岸
船し。同二十二日に江戸鐵炮洲こふと入り。上

岸して船舶に淹留し船宿には伊勢屋荘次郎といふ日ゝに八
丈嶋郡長の邸において、審問を復言するを凡三
回。即口書となる、九月十三日、十四日、十八日、三度にいたり事白す。公署に付
渡せり。公署は勘定所根岸肥前守また孝君の審問を復
言せること凡五回是又口書となる同年十月六日、七日、八日、十日、十七日、五度
なり。同年十月公署より邸君に付庚経業のものを
して。其に与ふ修を聴き銀等を察し。饑寒を憐恵民
慈愛の志日ゝに深し。累まさしく人にあひ。武記を
慄に更に度毛洒ゝとして。戦慄の思ひに多けり。
甚吉衛門より同郷の、須崎宗真といふ医生、業を京
都にまなひ、あの後にして秋月へうつり、但し類

族、ゆ流罪せし七年四忌をとむらふに、あひてま
さに東都に来、この時甚吉衛門にあひえしめ
再造人のごとくあやしみ覚へ帰ると然、かさらひけり、同月二十七日に回
嶋のものことふ互に送別の宴をまふけ。船舶の攬
に会集して共に杯を挙等袂をとなく各袖を
しぼりわかれけり。ひとり土州の長平病に臥ゐ
たまこれ。あはれにかひふし家廃してものは同年
十一月三日に帰国の暇をたまはり。甚吉衛門重
次郎もまた路程のうち、は廃荷のものに属し猶
盤纏を給り。送吏を属しまさしくちに賽願の志と
をとげさせれ。伊勢讃岐の両所へまふでけりと然。

僉國具をいそつき揚ろとして玉鉾の影ぬ曾於
かいてかれる。れふあとなきるの。まさぬる巣へ
かくるか。これそゑ還魂の漢といふへし

無人島談話上巻終

無人島談話下巻

薩摩侍醫　曽槃　識

地形

おとし漂落のものゝ。遮洋の船をさつて星漕いそくれ
る島ハ我くにの南洋。一孤の荒島にして。かくち
團帽の如。周囲をふよそ二里たらす。按ふ、元文之口書ふハ、一
里とあるに、其高さ凡十七八町。これ行歩の路程をいふなり。按ふ元文の口
書ふ、高三町といふ、是盖処をさありていふなるへし直立の四周の岸ハ皆断
壁ふして。奇疊城のことく。猱猿といへともいた
りかさし山勢巋然として。危石落ヶ如。雀嵬とし

て復倚実に目ふれをみるにあらされハ。其危を
しるへからす。足是を蹈にあらさるハ。其険をし
るへからす。そしめいるもの。西崖に二洞あり。
此洞ハ、始大坂の人住乃るところなりといふ其下ハ千尋の海に望て。
めくりかたし上嶔崎のところを攀怪鳥の栖宿
する所を過く。北崖にいたれハ岸につらなり小
坪あり、嶮崖十餘丈の下ハ碧緑の潮水をたゝし。
駭浪の聲つねに高阜にひゝき。また北行すれハ。
洞穴の所にいたる。これ新古六洞ある所なりといふ東に欠く
れハ巉ニ環曲のミふとに似たる所あり又其東

に。凡四五町計の石濱なり。其上に小阜なり。是修
船の所なり。洞穴をさる事凡四五町なるへしといつり左右の壁立削
なるごとく飛石上に攙此より南ハ阻難にして行
へからす。故道をとり洞穴の所より其巓にいた
るに。怪石峭峻さらに甚人跡のいたるへき所に
あらす。其中央以上に登り。其頂を望に。三尖の峰
離列せり。其中嶺ひとり頗る高。東西之嶺ハ。稍低
愈のぼりて。三峰折裂の所を窮に此より以上ハ
ふ焦礫傾蹋して升へからす。蓋いつまの時か。火
脈沸湧し。突出せるものゝことし。其尖峰の麓北

より南へ巡く。二道の小谷あり。左ハ半町長四五町に過ぎと云、
茅艸叢蕃し、此佐島の栖宿する所なり。北のうく
幽谷のきはまる所に。一大洞あり。こたり四五十尋横かさ三十
尋もありといふゝ。其西南の方。谷尽く崖をのぞむ所に。ま
た一大洞あり。右はひさ、北洞にひとしと云、これより南崖をの
ぞむに巉巌磊々是を窺ものゝ。神をうばはしむ。こ
れを臨者必魄を劫其下にいるものは。異木屈縮し
て。上叢の小林あり。漂落のもの時をうつしひ。ふ
こに来往し。これより西まて東。皆壁立の所にし
てめぐるへからず。凡此島。上下四周。皆石壁にまれ

に草なる所ハ土なるといへと。其原とそつかふ
一尺にみたず。大風雨にあふ時ハ茅草の蟠根剥
落して山骨滑然としてなうえれ。後茅芽を生る
に由なし。蓋南方窮髪の山といふもの。まゝ此多く
ひふるへし。我藩の漂民偶粘土をきつき實とし
て。其地形を摹出今其崖畧を示故にこゝにいさゝ
か地形を識まゝ其図を縮て。後に繪載す。蓋一
を挙て十ヲ遺きのみ

全圖

圖中引二線者即来往之道也

北面

南面

国立公文書館
National Archives of Japan

方位

夏六月八日に。無名の島を。正南の風ふいて、。幟（カゲ）を西北（サメリ）の隅にとり。帆を迄り幟にひらき。舟子のおとハにこれを杧ほひきまとるといふといへり仝月十三日青ヶ島にいさる此間六日、たゝゝ島影をみすといへり元文漂落の口供（クチガキ）をみるに。

元文四年。三月十日より。仝二十五日まで。凡三里計を濟く。五島相注らあり。無人の島あり。仝二十九日。此無名の島にいたり。仝年四月二十七月に戊亥のあゝをさして開船す此時ゝ八丈島地官の聞書ふ辰巳の風ふいてたりとあるせり、仝二十八日に。一島影を見たるに。田

風あしく翌五月朔日に、八丈島にいたる。按に、此船脚船なり。此間五六日海上にあり、聞書には、八日にして、八丈島へいたるといふ。海上の里程をよび島の方位は、詳ならず。あるいは、二百里といひ、または島呂某か記をみるに、延寶三年閏四月九日のゆふくれに、八丈島を開船して。同夜青ヶしまにいたる。其間十八里。或説には、三十五里。仝十日夜。四十里にして岩島なり。仝夜二十里。仝十一日昼四十里にして島なり。脚船にて流覧するに周圍三里計。高貳町程。岩間に小木あり。黒白の鳥栖宿といふ。此間里程八丈島より、を日よ投百十八里是までの鳴は。此に

いふ無名の島なるへし。今諸説を對考するに、日本より辰巳のあたりにあたり。其里程はかならす二百里のうちに有まさ地毬によりて。此島を察に。八丈の南。琉球の東。無人の北。二十七八度のうちにあるべし。六島一叢の圖なり。八丈をさすこと。斜正凡四五度。我國の里程にして凡三十里を一度とするといふ。されは日本より。凡辰巳の方にあたり。今渉録する所の諸説と。其方向里程をよび島数。ミな相符合せり。おもふに。彼の無名島は。かならすこゝにいふ六島一叢の所なるへし。さはあれと天地の濶き今管

窺蠡測のことを以て。志れを窮詰するになりしが。
尚後の考索をまつ。此島ハもとおのづから無人
の島にして。名稱なし。漂民ハ私に鳥島と唱ふる
ところ。青ヶ島の土人。單になつけて無人島とい
ひたり。桜に在にいふ無人島ハ。小笠島と呼所に
して。此島と異なり。清の隨園が新齊諧に云。海水
澎湖にいたりて漸低。琉球にちかき時ハ。これを
落際といふ。落ハ水落下してかへらさるなり。聞
人臺灣に過て風に媽ろ迅漈中に落思に萬に生
現なし。忽大震一聲を聞。人々跌倒して遂にうこ

かれの。徐にこれを見るに方より一荒島にいたるな
とをなる。岩上の砂石尽是赤金。怪鳥なり人をう
くとハの。人うかるときハ。捕てなれを食といふ
此まゝ無名の島に似たり。姑異聞をなるし。後考
に始なふるのミ。

内務省

西洋地球畧圖 南北正位

西

東

氣候

暦日ハはじめ正月を覚へ月候(コウ)をたゞしかりきと。後ハ閏月をまうけして遂ニ正候をうしなふ。日候ハ満月を十五日とさだめしきど晦朔ハ詳(ツマビラカ)ならず。按ニ享保の閏紀(コキ)(カキ)ニハ。よりの葉ニ。朔より晦までの。日かずをあるずといへりことし帰るゝのハ。よしあしのあることをいへり。

春　正二月とおなじ頃ハ。日州の九月頃の氣候とひとし。日州ハ北極出地、三十二度なりといふ、按ニ。日州の九月ハ関東の月ニ似たり。

夏　五月とおもふ頃ハ大鳥とひさしくいつくへす行。夏至と思ふころハ旭日ことにあたく。正午の日中天にかゝり。炎暑尤烈しく。人みつから其影を蹋。按に夏至の日ハ赤道をさること北方の二十三度半行なり。今此しまを察するに蓋二十六七度の中にあり。おもふに其照臨せるところ。凡にえするへし。

秋　八月とれはへし頃。大鳥来秋の三月と思ふ時ハ大氏、土地の夏とれなし時候なり。時に燕鳥むらかり来。此琉球の風土に近し。

冬　嚴寒の頃といへど。霜雪ふることなく水またこほらず。つねに暖和にして。縷一襲あらひば毛衣一襲にこさせすらき。たゝ異木の葉隕落するのみ。

四季　青艸とへり。琉球とひとし。中山傳信録に、四季青くさかり、黄鶯つねに韾韻を囀。繍眼児まく其聲を和すれども。是を耳に説ものなし。憎へきハ数千のからす。洞穴をうかゝひ空乏の糧をぬすむともまく蚊蠅おほく。其かくれなきと。一歳のうち纔に二月にたらず。まく羽蟲のあくまて血をす

なる。いと物うし

風　大地ところにしてつねに大風あり。冬月の頃は。日々にいよ〳〵烈（ハゲシ）。按に。清の王漁洋が香祖筆記に云。臺湾風俗（信）。他海とことなり。風大にしてはげしきものを颶とよぶ。按に揚升菴云。颶当に颶に作へし。颶音貝。甚るものを颱とよぶ。颶は倏（タチマチ）發て倏（タチマチ）やむ。つねに連日やまなは正二三四月発るものを颶とよぶ。五六七八月に発るものを颱トよぶ。九月は北風はじめはげし、或は連月にわたるこれ此島の風信臺湾と較相似たり　按に臺湾は北極出地二十三度余なり

雨　冬の頃は。時雨などのやうにふるとし降れども、たちまちまた晴れり。春の氣候となれ同へし頃は。半日はふりもありつゞくことなり。みふつと晴て。これ水を石罅（セキコ・イシノハレメ）岩坎（ガンカン・アナ）小池のうちへ汲（クミ）貯（タクハヘ）

雷　夏秋の交（カウ・アイダ）鳴（ナリ）わたることありといへども。其聲尤遠し四季にへゝ大地よりまれなり

震　たれにも驚浪の音たかきゆへにや。震動の聲あることをれはつき。享保の口供（コウキヤウ・クチガキ）をみるに。二十年のうちにやうやく一度震動あることを

れはゆるとて此時海あつゝありとなるせり。

潮煙　俗に浪の穂といひ。またしほけといふとり。按にそれハおふかしの名称にハあらは、蓋日州地方のことなり、此波大風にふひき。高阜の青茅をひたし。茅皆かれて咸黄阜となる。また幾もなくして、青阜となる。

疾　れはくハ。皆水腫を患て死したり。享保の漂民なり。また四人水腫を患て死となるせり。按に淮南子墜形訓に云。岸下の氣。腫多しとてへたり。こハ岩洞にありける田ゑ。即岸下の氣に感をうさるゝものなり。

物産

茅古名智まゝ智加也。按ずるに。いにしへの時。あやといひしハ。凡くさとにへくいひしことをを見へたり。即草野姫。鸎鵜草のるい是なり。尚ほまたひろくに。源君美の東雅にくへたり。八丈島の土名に。馬草といひく。其勾萠を。馬にあふといへり。此山巘の間。土なる所に生く四季つねになり。時々煙波をあらむりて枯るといへとも。たちまちまた生じ。大地になるものより。葉やはらかにして。芒刺なし。其嫩苗をとり。日にさらし蘿とな

し。索となし。其老たるハ。笠をなし。蓑となし。筵と
なし。またつ絲に薪にあくるちふ其利ことにお
ほし。
隨年薮されハ八丈島土名なり。按にまむそハ。酸
葉といふ名の轉訛なり。漢名酸模。漂落のゑの。誤
て和大黄といへり。和大黄てふものハ。漢名羊蹄
倶本草綱目にミへたり。酸模羊蹄一類二種にし
て酸模ハ葉稍小にして莖赤其味ミな酸れ白く
ハ原野の旱地におふる。羊蹄ハ。葉大きくして莖青
く。根黄色。味澁して下濕の地に生るあるに

綱目。ミふ水草の部にいされゑの尤いふかし。漂
民もしめ煙草にかゑる。此葉をとりまぜろして。
換ゑすふるに。ミほひあしく後ハ也ふふれるを
あり
延別図八丈島土名なり。按ま是ゑびたるをい
ふ名の轉訛なり。舊和名抄にゑびかつらと註せ
り。今俗まさ野葡萄といへり。漢名紫葛。本草綱目
にミへたり。莖葉とゑに葡萄に似て稍小なり。花
もまさひくし。後に小黒子をむすぶ其ぶてま實
さるをとりしふふといふ。

晝顔　丹羽長平の和名類編に。これを隼人草と注せ。漢名旋花。本草綱目にみへたり。漂民皆晝さく花をさして。朝顔といひけるは。いともあやなし。

保登久里　不用の草なり。薩摩方言なり。其草莠の類にして尤

波袮　青ヶ島土名なり。海島風土記にはむだとあるなり。此海滓の一種にして。かたち裙帯菜のごとし。狹にあり。とり得て煮てくらふといふ。日にあてかれば。硬皺してくろふかくなれど、いへり。漢

名いまだ詳ならず。

異木　口供にいつさきに似たりといふものの是なり。按に、梧桐俗に云青ぎり　薩摩方言にいつさきと云　其幹屈曲して。一丈にあまれり。春の頃。嫩莖を擢て葉を発すると。梧桐に似たり。夏月のころに碎花をひらき。後に実を生ず。其かたちまさに梧桐に似て小なり。うちに仁あり。荏子のごとし。あるひは白麻子の類ともいふ。時をうかがひ。其嫩莖を剪皮を剥水にひたし。其あくへるいをまち。日にさらして。索縄につくる。其梗は。焚て引火の炭をなすに堪たり。冬月

にいたれハ。其葉ミな飄落(ヘウラク)して此樹たつかに南崖嶮峭の所にあるのミ。桜に海島風土記に。安加伊の木といふもの也り。樹梧桐(アヲギリ)に似て屈曲し。其性やせうかなり。其葉また梧桐に似たり。往者(サキ)に田村西湖(セイコ)伊豆属嶋に役せる時。此樹をひらしてミるに本草綱目に載る所の楸なりといへり。こゝにいふ異木も有ひハ即楸なる事尚後の識者をまつのミ。

米粟美　薩摩方言なり。即大方にいふ春くミ漢名胡頽子。本草綱目にミへたり。樹の高僅(ハツカ)に五六尺許。其圍も五六寸に過す。葉ハ櫨子(ボケ)に似て。面(オモテ)青背(ウラ)白其實ハ三五相つゞきて枝にミてり。故に延喜式に。是を諸生(モロナリ)といふ。また本朝式に。諸(モロ)生子といへり。またくにの俗およそ物われはきをいひて。諸といふなり。其實赤くつやある時をまちてとりくらふと云。

豆藤　またたまとこといふ。倶に八丈島土名なり。樹の高五六尺。茎なかく葉ハ枇杷に似て薄且やわらかなり。冬月かれて春月また新芽(ミンケ)を発し。春夏の交(アヒダ)葉間より穂(スイ)をいだし。小碎(サイ)花をさかうき。

小子をむまさぬといへり。按に。井上貞方か。八丈島
四島の記にいはく此樹を載。桁衡直にして高二
丈ばかりにいたる。木心に纈あり。其材は用にあ
たらず。葉は柿に似て柔なり。仲春穂を擢て小花
をひらき。季夏實をむすぶに。其形空木に似て。數十
連綴す。熟せば黄なり。豆藤といふ名。此によるな
り。按に。此荊の類なれど確當の漢名はいまだ
詳ならず

宇具比須　國史にみな鶯字をえち〻。按に。淵鑑
類函に。顧渚山記を引ていふ。山鳥鴝鵒のごとく
にして蒼正二月にいたることに聲をなすは。春
起なり三月にいたり止。春去なり茶を采人よ
びて報春鳥とすといへり。これらもひとの漢
名に。報春鳥なるべし島中にあるもの。四季は
ねに嘌只冬月は聲に靈韻なくさえめるしとい
へり。まさに按に。今唐山の人呼て紫鶺鴒となすと
いへり。

花吸　薩摩方言なり。關東にて眼白といふ。此
鳥眼瞼色白。故にかくいふ。漢名繍眼兒常熟縣志に
みえたり。島中に産するもの。四季つねに和鳴す

と言。

燕　和名抄に。爾雅の集注を引て鷰をつはくらめと訓せり。按に。本草綱目に越燕(エツエン)。胡燕(コエン)。石燕の三種あり。おもふに和名に訓せるところの鷰は。蓋即越燕なるべし。胡燕は。はもしらめといふ。石燕は。いはつはめといふ。今此島にはさるものは。まさに越燕なるべし秋の比まであり来とらへとも栖宿する所なきにや。あさしらとゝまらはといへり。まゝ按に。徐葆光(ジヨホウコウ)が中山傳信録。七月令に玄鳥来とゐるせり。此島の。風氣。琉球にひとし

烏　萬葉集に。からすと。ころくといふおともなり。按に。爾雅に。純黒にして反哺(ハンポ)のなすものを烏といふ。説文に。孝烏(コウウ)といふもの即これなり。俗にはしほそからすといふ。又大嘴(ハシ)にして性貪(ムサボル)ものを。師曠(コウ)が禽經(キンケイ)に。大嘴(シ)烏といふ。まゝ燕烏。山烏なり。本草綱目にみへたり。これ烏に四種になり。此島にあるところのものは。大嘴烏なるべし。はじめ少しなりけるに。後は卵育(ランイク)せしにや。群集して。食に就。晨夕是に労の[illegible]いへり

志良夫(シロフ)　八丈島土名なり。是白質(シツ)黒文の鳥

へ。かくいふにや。南部にて。おゝへといふといへり。凛民は。みづから名つけて。大鳥といふ。其形鵞(アヒル)に似て尤大なり。両翼をひろぐるときは。凡六七尺或は七八尺なり。全身白色にして。つばさの端と尾の稍(スエ)は黒色なり。嘴の色くろく。或は淡紅(ウスアカ)もあり。唇(クチビル)に近き所。淡青(ウスアヲ)にして。長五寸ばかり。脚(アシ)もまたあひるのごとくにして。色青黒 按に。海島風土記には もしとあしぐろ。黄色に画のきざあり 掌に蹼(ミヅカキ)あり。其形状は。鳩雄全日く雛別はへうふは。秋八月と思る、北来。茅間に栖宿して。卵を育しつ秋に海中に入り。魚を採て

餌とすれば。海島風土記に。鳴声鵞に似たりといへり。卵の大はきさ。拳(コブシ)のごとく。雛は初め灰黒色にして。春毛羽を換(カユ)。五月の頃と思ふ時飛さりぬる。此鳥人を見てもおそれず。島谷某が説に青ヶ島より百里餘にして鵜の如く黒白の鳥なり。水手のために捕(トル)といふものゝ。まさにこれなり。按に。新斉諧に。落漈の怪鳥。人を見てもおそれず。人の來る時は。捕(トリ)てくらうといへり。是まさしくこれにあらん。るべし。また按に元の陶九成が輟耕録に。信天縁といふ鳥あり。按ずるに謝在杭信天翁につくる 又本草綱目にもみ

へきり鶺鴒の註 是蓋又志らふなるへし。篤信ハ洋の
太丈一名あはふ鳥と呼ものを。信天縁となす。今
按に。皆一物なり

左々魚 八丈島土名なり。九州西國地方にて
ちむ鯛といひ。関東にて黒鯛といふものゝ一種
にして。漢名烏鴉魚なるへし。明の何喬遠か閩書
南産志にミへたり。鱗く細し。或ハ青黒色。肉志ろ
し。此島にて作り得るものハ。ながさ七八寸より
尺餘に過す。四時つねにあり。海島風土記にいふ
十月より正月の末まてそ。盛はと云。藻くさを餌
とかし。綵三四十尋を垂て釣。形黒鯛に似てあふ
らふらし臭氣を帯しかれ。大なるを。つゝいつ
鯛と云。小なるを遠ゑくろと云。またさ皿渡といふ。
此魚菜菔および雜穀をまし煮てくらふ。冬
春の武利となると云。

没古 薩摩方言なり。漂民名付て赤魚とい
ふ。関東にて赤目ルといふ魚のことく。またかさ
こに似て長五寸より。鱗く細にして肉志
ろし。是れ蓋し明の鄒善長彙苑詳註に載る所の。
緋魚の類なるへし。按に。海島風土記にまれの魚

といふものなり。夏より秋の頃まで洋にて釣。丈は三尺餘もあり。肉やはらかにしてあぶら多くてされ易し。これ鱒のまゝの魚と見えたり。其図げる所をみるに。此にいふ没古と。其類色軟相似たり。因てこゝに記して後考に備。

太古　漢名章魚。本草綱目にみへたり。まれに捕へたるは。最小なり。大なるはえがたし。

海亀。まされはう先といふ。漢名蠵亀。本草綱目にみへたり。味鳥なるいきといへり。一種鼋と云ものなり。これ海中の大亀なり。詳に我藩輯成げる所の。成形図説に載事あれば。こゝに略す。

非良美　青ヶ島土名なり。俗に新婦礫新婦笠などいふ。漢名石磷。閩書南産志にみへたり。此かひをよく澆磯に固着して生す。形箬笠に似たり。一片は殼。一片は肉なり。大小高低五色斑紋。一様ならず。此島のものは大抵はとり一寸もありなりと云。海島風土記に云。味さゝえに似てかたし。神田玄泉が曰東魚普に。これを蝛となる。是をひも同類なれとも。それのゝの異種なり。俗に背あひといふ。所謂蝛また閩書南産志にみへたり」。

志陀多美(シタヾミ) 八丈島土名なり。和名称に。河貝子。みなと註せるもの是なり。俗蜷字を用るは非なり。又あるひはかはになといふ。和字正鑑に。かはにな も河みなの略なるといふ。漢名蝸蠃(クワラ)。本草綱目にみへたり。此外河海皆あるところの小螺にして人能しるものなれども。こゝに釈(シヤク)せり。古事記神武天皇御製の歌に。神風の。伊勢の海の。大石に。蛟(バイ)もとふろふ。しただみと読給り。今按に。和名抄に。崔禹食経を引て。小蠃子。かくち甲蠃(カフラ)に似て細小。口に白玉の蓋(カイ)(フタ)ありといふ注に揚氏漢語抄を引て。細螺しただみと注せり。此を考るに。いにしへにいふしたゞみは本草綱目に載る所の老若子にして。俗にいふ醋似なり。是物とおなじと古昔(コセキ)の名称儼然(ケンゼン)として洪荒の内にのこり。其旧想へし。

蚊(カ) 是世の市井(シセイ)(イチナカ)にあるものより。稍大なり。思ふに蓋(ケダシ)豹脚(ニヤウキヤク)(ヤブカ)の類なるへし。凡一歳のうち厳寒(ゲンカン)とおはゐるほどまつゝに五六十日蟄(カクル)といへり

蠅(ハヘ) 是まゝ稍大にして。其かくるゝを。蚊と時をれなりけり。

羽蟲　是大鳥の體に生し。やゝ谷間なとの敗毛中に生る。按に。飛ものは蠓なり。爾雅にみへたり。蚊ものは蝻なり。顧野王玉篇にみへたり。和名抄にはだにと訓る。皆人に就て血を咂脈搨の害をなるものなり。

塩　炎暑のはげしき時。瀕海の大石こに熾る如し。時に海嘯其所に翻騰し。潮水石凹のうちにたまへ。烈日にてらされ。後遂に凝て塩となる。此即自然塩なり。漂民とり蓄へ食料に供るといふ。按に。亜弗利加海島喝布歇尓徳のうち（カーフ、ヘルデ、）

こゝに訳して緑峯島といふ沙剌島。（サーラ、即塩島の義）此地日々に潮の来ことに。海岸の地上に漲り。其退ときに。海濱に七十箇の大滙あり。其内にのあるもあまの潮。大陽に煎熬せられて自然に塩となるなり。これらくとも其塩。沙石薑苡の属れはく其中に雜波尓杜瓦杜の人。是をとりて。聖土由白私に。いるし。其地の塩を製るものに其沙蘆織物さゝしむ（此説ハ大医令桂川氏の地球説の中に見へたり）此塩正にこれも一類なり。

輕石　一此二種あり。漂民あへて辨しえる。一ハ潮沫の凝結るものにして。其質緻密。世に消皮

を磨くものにもちゐる也。本草に載るところの海浮石なり。一種火山の燃石。海中に飄落して歴年波濤にみがゝるゝものなり。其質粗。此即山中の石枯て海中に浮ものなり。按に方睍桐か物理小識に。青石を焼て石灰となし。其灰となさゞる者。石枯て水上にうかぶといへりとはこのものゝ同類なり。

石灰は蝸蠃石磷の殻を焼て灰となる。此即蛤灰蜃灰と一様なり。まゝ浮石を焼て灰ともなる。倶に塩水に和し泥となし。に池及盛水桶をかこむ。又船鉛の料となる。

識餘

稲　享保漂民の口供を見るに。在島の時。漂到せし米苞のうちに粗米ありけれは。此を岩間の土ある所をよミうへしとつゝに一歩あるひは二歩はかり植付たるに。とし〳〵に成實を收むといふ。又同時の記聞に植付たる稲一年。と思ふ内に。三度ミのるといふ時により二苞或は五六升得とあるせり。帰東の時。其の米を載きたるといふ。

晨草（アシタクサ）　まこあしたそともいふ。これ青ヶ島に

て草糧とせしくさなり。八島丈にても専糧となす。其草獨活に似て其葉尚光澤ありまた辛臭の氣なく根魁をなして冬月凍斃せず。四時つねにあり。大和本草にこれを鹹草となすに誤なり鹹草ハ本草綱目盐麸樹の附録にありて葉は斜蒿に似たりといへり。斜蒿の葉を察するに、あしたもに似るべくもなし。

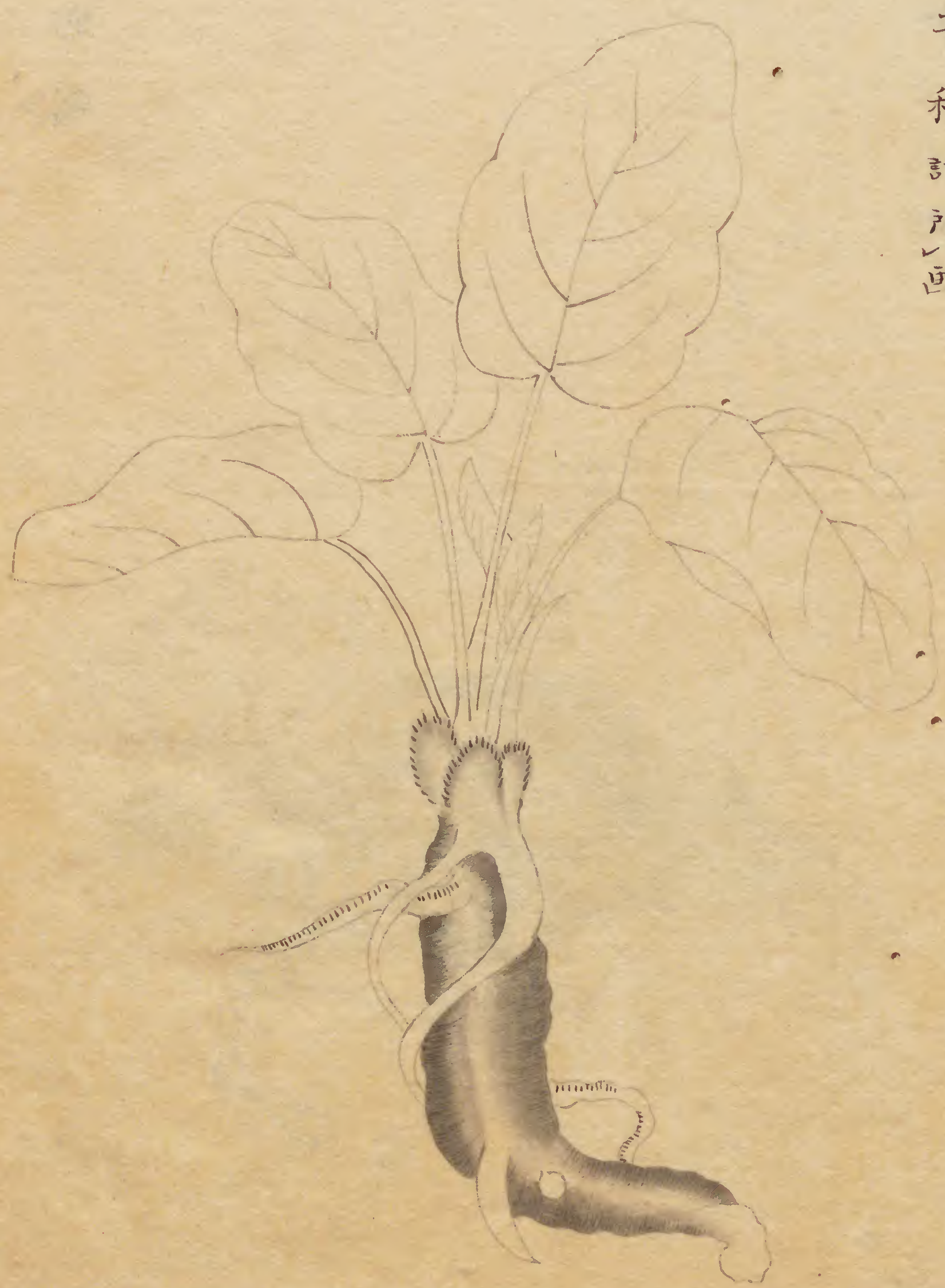
都波、是まさに青ヶ島の食料なり。都波は通俗の称なり。葉款冬に似てひかりあり。秋の頃茎を出して黄花を開く。漢名槖吾。唐の顔師古注急就章にみへたり

内務省

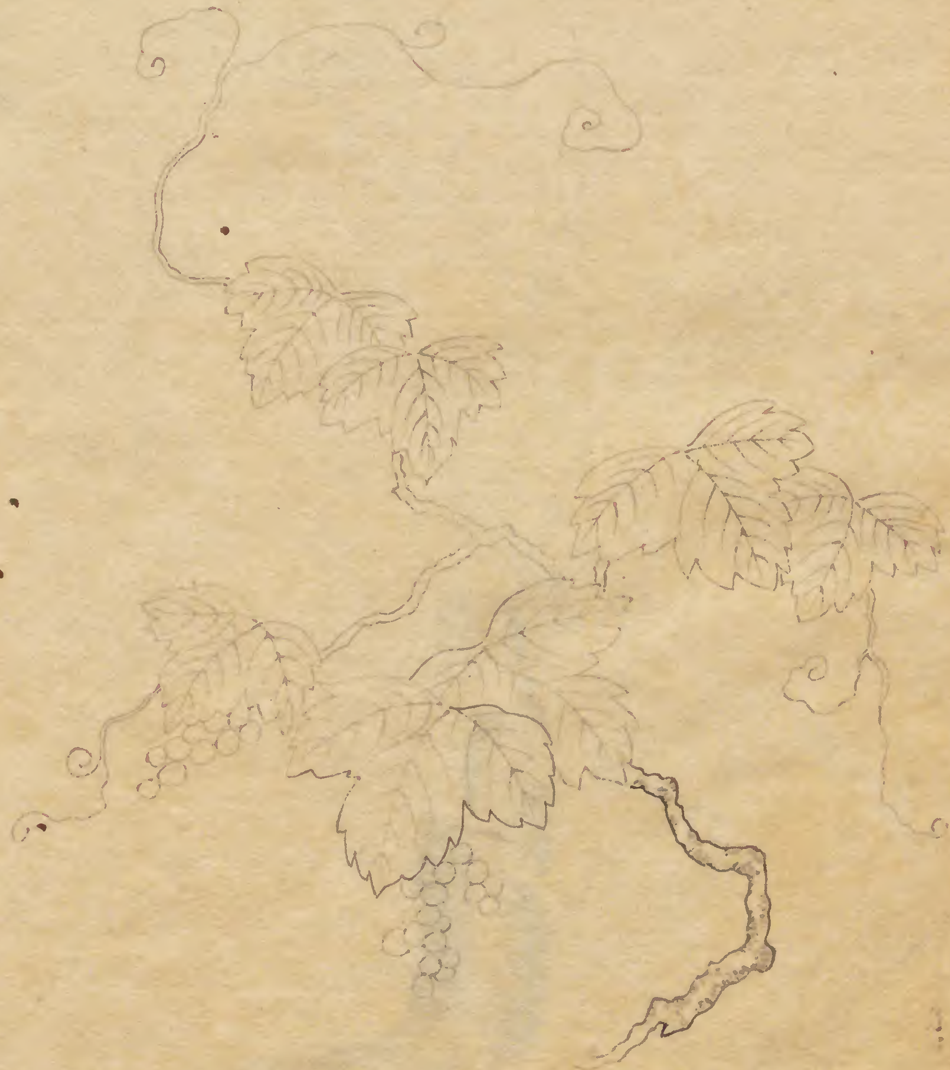
国立公文書館 National Archives of Japan

隨辛秡

貞方画島記所画

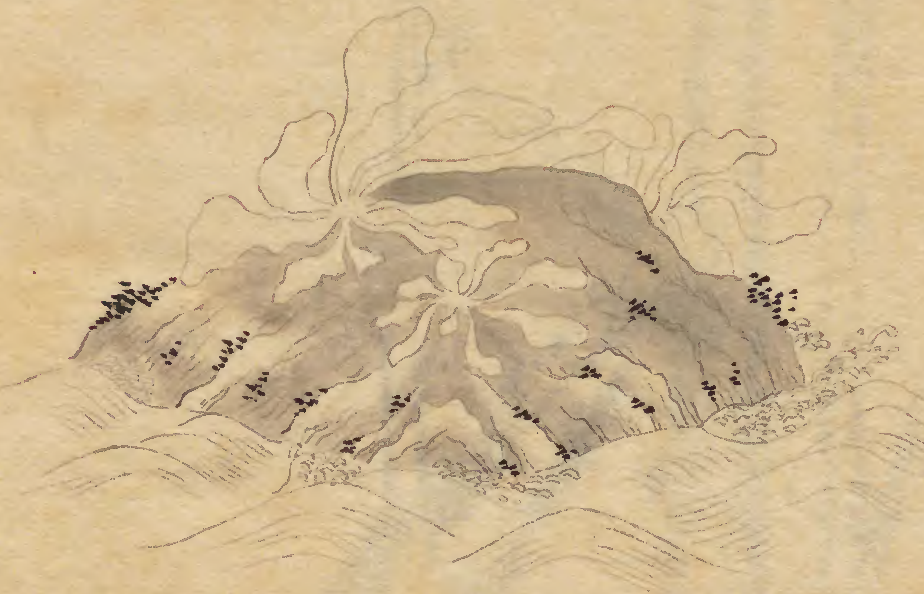


延別圖（エベズ）



波稜（ハバ）

海島風土記所ゝ画

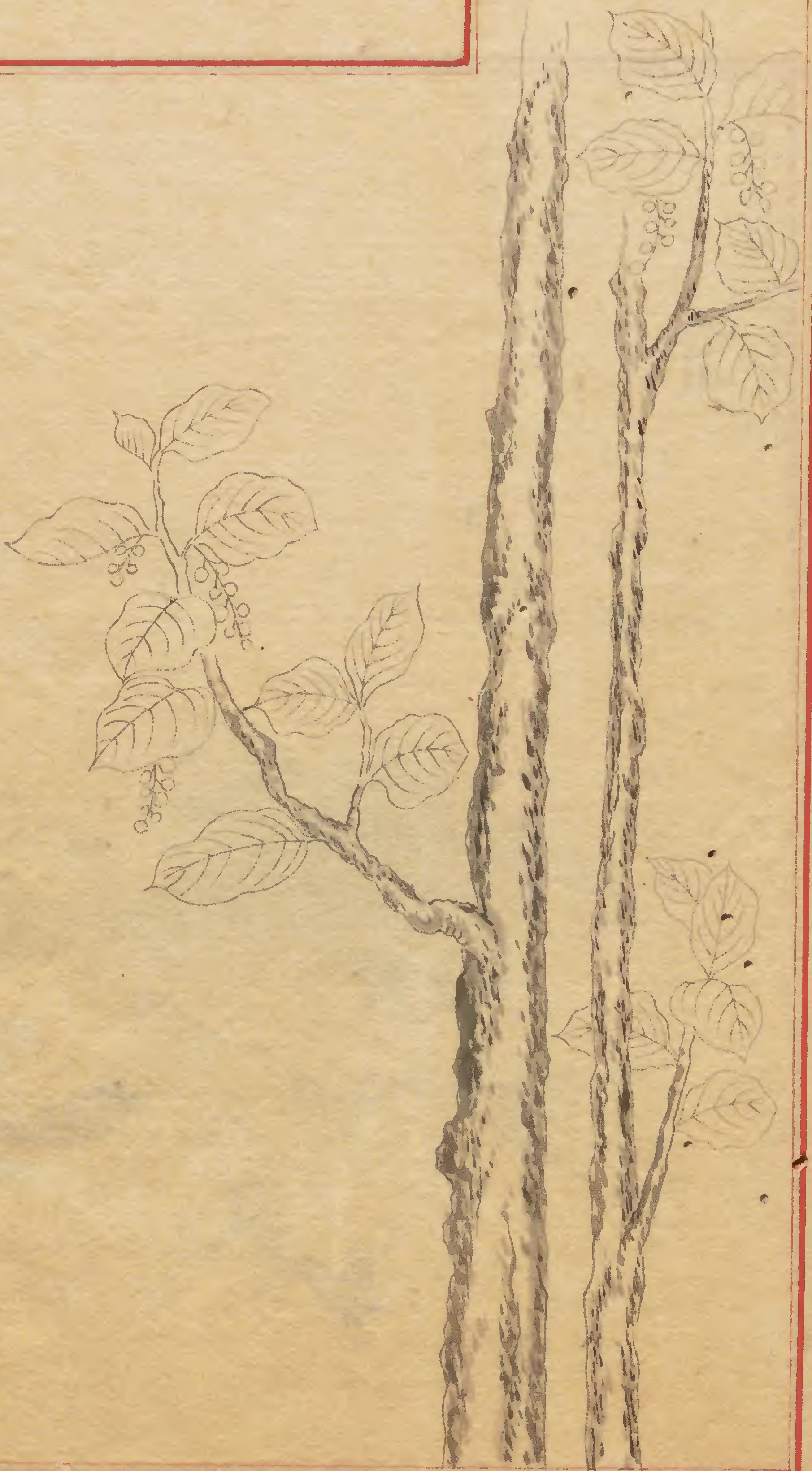


安加伊乃木（アカイノキ）

仝上 蓋シ異木也

豆藤

海嶋風土記所画



志良夫（シラフ）

漂人所ニ自製一

左々魚

貞方田島記所レ画

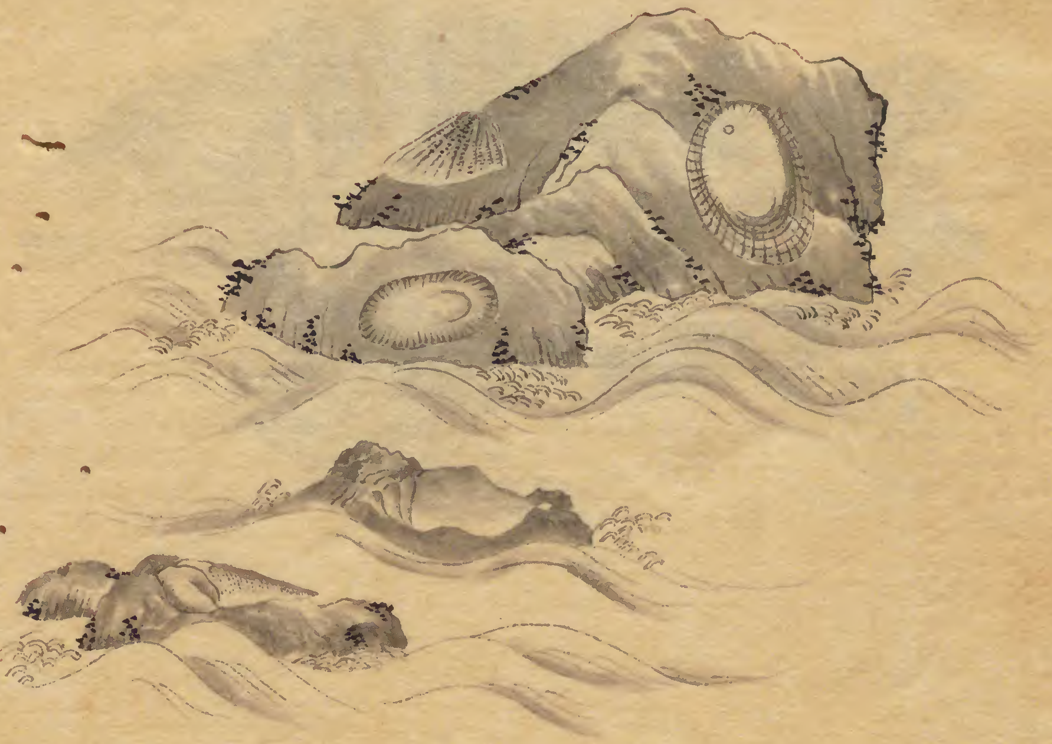
国立公文書館
National Archives of Japan

没古（ホコ）

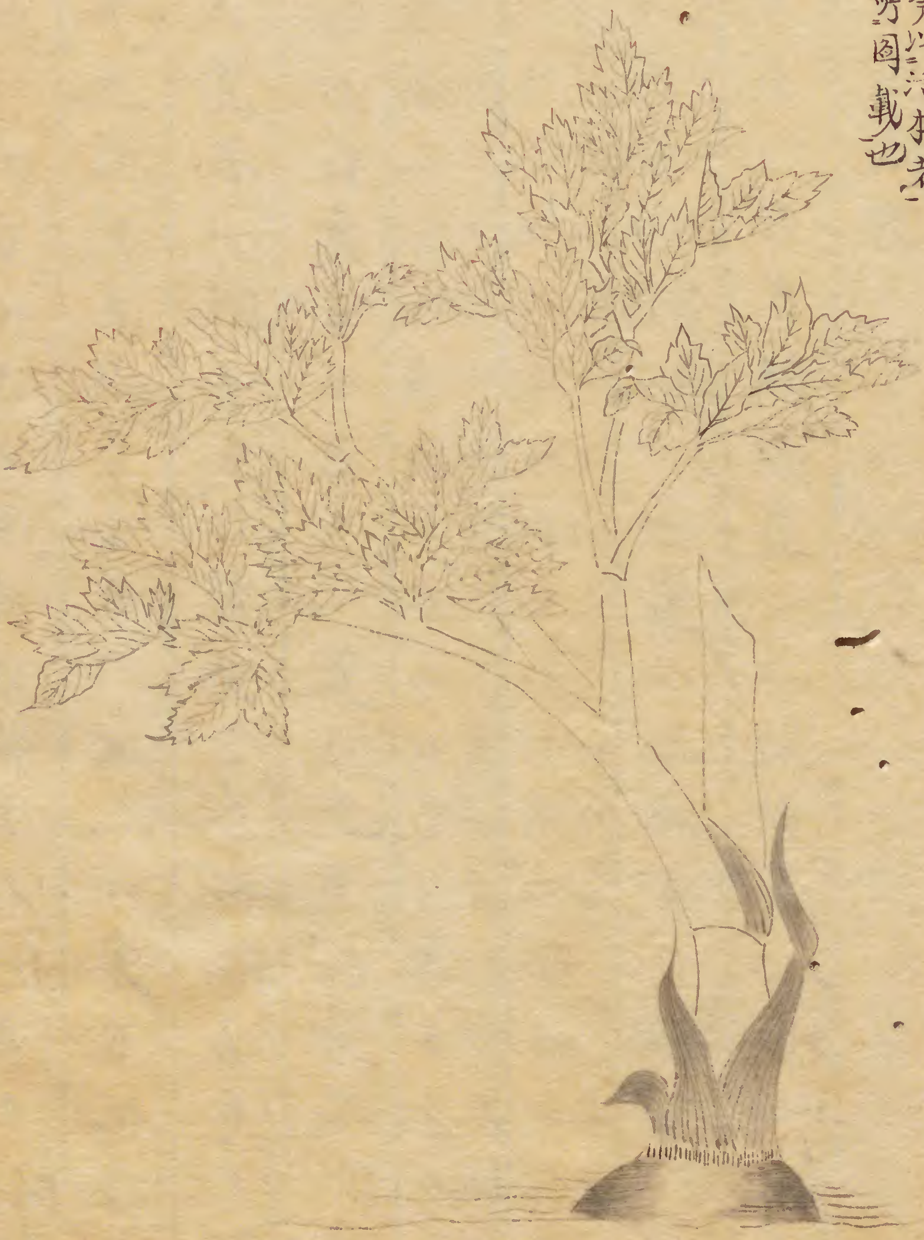
海亀（ウミカイ）

国立公文書館
National Archives of Japan

非良美（ヒラミ）上 志陀多美（シタタミ）下



晨草（アミタクサ）今以活本者野図載也



洞穴

漂落していたる時。西崖に二洞あり。大坂のものゝいふになり
て後より又一洞を鑿て、北崖に三洞なり。按に享保
其居を分列といふ。漂落のく
ち書をとるに即二洞なりといふ、今こゝに三洞
といふ、おもふに其一洞ハいつきの時につくれ
るもの歟、つまひらかならず、乃、蓋元文以後天明以
前に漂落のものあるか、まさりまゝあるへからす
り、其洞口皆東方にむかふ、寛政元年の秋、一洞を
鑿また翌年一洞をきり、其後またゝ一洞をきり、新
洞都て三所。みな北崖にあり。其二ハ東方にむか
ふ。其一ハ西方にむかふ。新故都て八洞あり。洞穴方位
の概略ハ、地形図中に見へたり、其廣さハ、四方凡五六尺。あるひ

ハ六七尺。高も又畧をなし。うちに茅莚をしき。一
洞に凡四五人をゝり住居て。其かたはらに。石灶
を造り。盛水槽および小池をもふけ。晨夕をいと
なむ。冬ハ洞口に茅薦をかけて。寒風甚雨をしの
ぎ。春より秋の季まてハ。蚊虻はくしのひかたく。
つねに茅を焚てこれを避。あるひハ鳥油を燃て
明をとり。ミに天照太神を祷。帰郷の誓をむすひ
けると扨。ある時崖下に小樽の漂到を拾とり。是
をみるに金毘羅権現に。御酒を供したるものな
り。即まくこれを齎て。金毘羅に生還のことをい

のりけるとなり。是彼島より持来れる（今讃州へ獻奉にや）榮右衛門
ハ。故郷をいでし時より。観音経一巻を身に佩て。
朝夕心に暗誦しけるといへり。今この岩洞の住
居を聞に。是いにしへの天津神籬天津磐戸にこ
もりせ給ひも尚かくはありなんと人さへなれと。其
風姿を想ひみるに。遁世岩穴の士に似て。つねに只
日の蚤莫を見て。心なき雑慮に堪ぬ。浦さひしく世
にをある左遷の人より。浅猿かるへし。按に。西崖
の一洞。北崖の二洞ハこれ自然のものなり。まさ
あるひハ其先漂落のもの有てつくりしもの欤。

今あくさしるへかゝり揚升菴文集に云。凡山洞岩穴に竅ありて明を通ずるなるを星牖といひ。大なるを月窗といふ。こゝにいふ洞穴中に。これありや否。日々に紛綸としてとひをうしなふ。

服飾

毛衣　信天縁の皮毛を日にさらし。これをぬひあはせて衣となれり。按に享保中漂落の人。寛政のはじめより。其翮毛をあつめて。蓑衣のごとくに綴て。衣となれり。其製更にくはし。今図載のは、紙をきりて其かたちをうつして再ゐ　按に古への毛裘てふ
りき、撫見に按のふ、
ものは。漢の司馬相如が鷫鸘の裘、斉の文帝の孔雀毛裘の如き。皆奢侈の珍玩なり。漂客の製せるものは。荒島偶然の製にして。猶太古の人。血をのみ。毛を衣たるかたちとし。蓋遯世山林の士。羽衣

の仙と称せるものといへと。此人にならふへし
佩刀一把　日州のものの携持たり
羽扇　大鳥のはねをつらねて扇となせり。昔諸葛亮三軍を指麾する。白羽の扇を執與
茅笠　かやにて山野の人。あるひは雉ねらふひと云笠に等し。炎暑の時戴て。日光をさへきり。雨もまたしのくへし。
念珠　漂到の異木にてはくるものあり（按に享保の客は把の柄にてつくるとなる）これ僉荒の下界に落て勧善懲悪の心。猶れのつゝら生れ。丈性の善なる所に

るへし
草履　茅を熟して織。炙轂子云。夏高草を以て履となし。また淵鑑類函に載劉真長家貧にして。茫屩を織といふ。これ茫屩また此類なるへし。

内務省

羽衣（ハゴロモ）

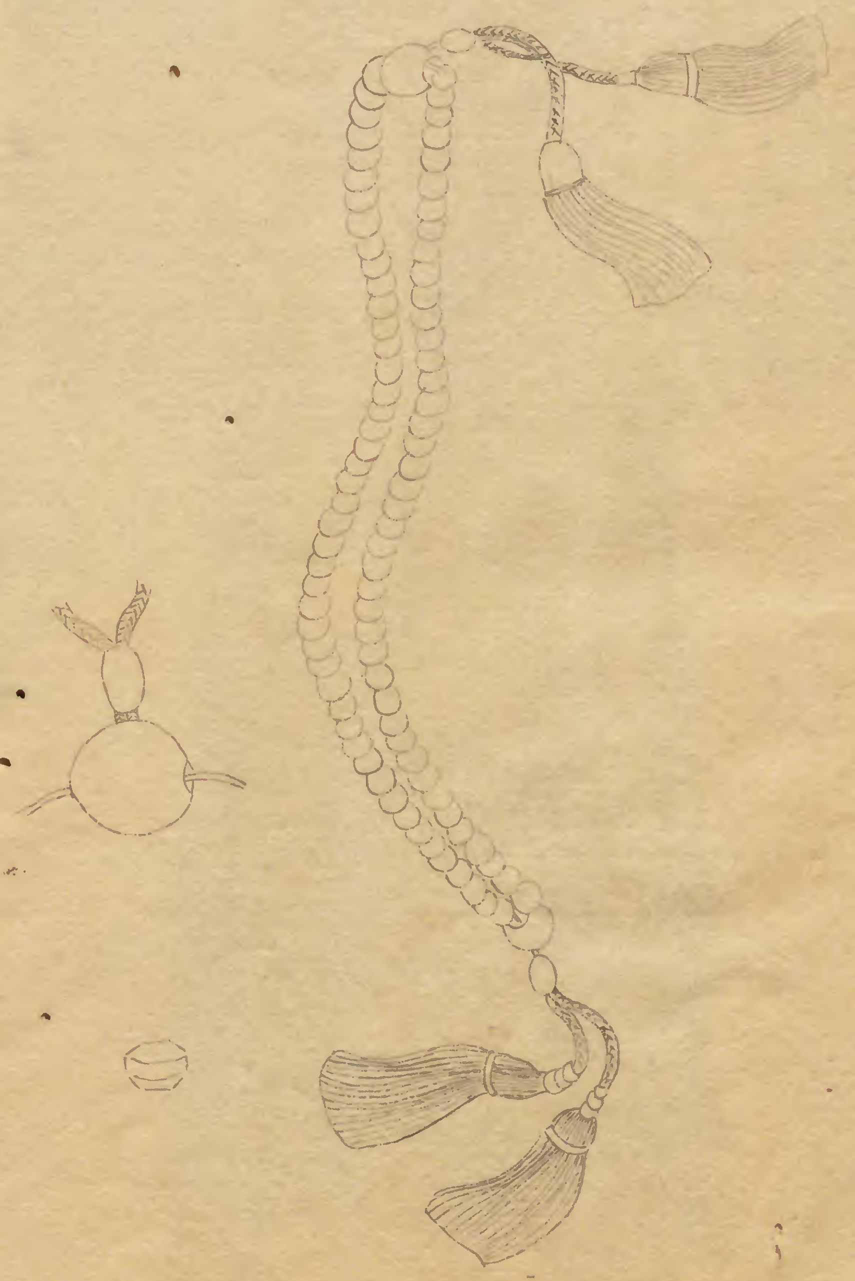
羽扇（ハウチハ）

茅笠（カヤカサ）

食料

信天縁　秋八月の頃より。夏五月の頃まてハ。常に此鳥を捕て。其肉を塩水に煮てくらひ。まれに其卵もとりえてくらふ。其肉の味粗悪にして。脂多く其気まさくさし。卵のあぢハひハ鶩に似てくさし。ともにはしめハくらふにたへかね久しく。其臭をわするれ。猶鮑魚の市に入るものゝ如。山海經に云。方股の國魚を衣軀をくらふ。郭璞の註に。魚皮を以て衣となる。軀ハ水鳥なり音憂揚瑱の補注に。軀ハ即鷗なり。また均藻々云玄股の國魚を

念珠（ジユズ）



衣鷗を食とこも他の國にもまゝかゝる所のあ
りけり。土佐の國のもの。去しめ此島に漂落せし
時。饑えて此島を捕生食して壽をわたりける。夏
の半と思ひし頃。頓に皆飛たちて行方なくなり
にけれハ。うゑて食べきものなく。茫然として膽
つぶき荒歎にあふか如。つ孫の心のなくされよ
りして魚を釣くらふといへりまゝ其後もとし
おとに鳥の立行跡ハ一つ孫の産なき心地してお
はく捕えたる時ハ。乾腊となして収めくえひ。夏
月魚とゝもに。骨董羹となしくらふといへり。

左々魚　螺の肉を餌となして。つりを得ることを
れは一たりとりふつりえて煮くらひまさなる
ひハ乾腊となしおくもなとしくり。肉臭氣あり
て上味にあらずと。いへと四時常にありて給養
に益ありと云。
没古　味あしくして毒なしあるひハ火にあ
ぶりて病丈の給食となすといへり
章魚　まれに捕ときハ。塩水に煮くらふ
蠵亀　在島中。一ツ二三頭を得たりしハ塩
水に煮てくらふといへり

蝸蠃　塩水に煮て肉をくらふといふ。

石磷　まてあらいそとおなじ。

波紋　米得て生にて煮くらふ乾枯したるものはめたしと云。

紫蔦　夏秋の文實をとり生に食。

天水　つねになしと先く。石罅岩坎小池水槽に貯とちふ大旱の時は雨降の神をいのるといふ其多なるにあふ時は鹹水を飲をありといへり

淮南子に云。いにしへは民草をくらひ。水をのみ樹木の實をとり。蠃蠬の肉を食ます陸賈新語に云。いにしへは民人肉をくらひ。血を飲。皮毛を衣とすなりこの島も其ことの如にして尚太古になむとし。凡天地の間。日月の照臨する所は。蓋しものあり。物あれはなかなか五味あり。五味あれは人の功用にあらずさることなし。今此無人の島といへとも日月照臨の地にしあれは人智のめしこきなよりて壽域をまこり。生還の期を得たり。自然の妙といふへし

器材

刀一把　是薩州方言山がーしと云ものゝかーて形佩刀の如且短山林に入るの佩て荊棘を劉といくり

曲尺一條

錯子二柄　一柄ハ敗損にるもれあり。

鋸一握　長一尺餘。

鑿三握　一握ハ不用にかゝる

斧二柄　以上六種ハ日州の、几の携いゐるといふ、

凬霜一坐　口供に久七これを製と云るしれれ

と。其實ハ八五郎ヵ家て其造法をしりて甚右衛門へをしへ遂に作り得たりといへり。風板の四端ハ故綿をくりつけ。火筒ハ螺灰を泥となしてつくりたりといへり、

千斤一握

鐵算子一握　此鐵を錘て算子となし凡船材を縫ふこの物を釘のかはりに當てうち定畐なり漢名いまた何といふことをしらす俗に釘〆と云。

釘鏨　凡大釘を後に釘を旋といふ漢名いまた詳ならす

鐵鎚一柄

屠刀　各作り持て木皮を剝髮も薙といへり

錐一條

墨廂一坐

鐵釘　以上八種ハ在島の時新ニ製、鍛冶にあつくることハ專ら久七其主となりて。作り得たりと云

鍋二口　大坂船携ののほるもの一口。日州船携登もの一口。此うち一口少しく損敗しゝるもの

を洞穴中に藏のなりといふ。
釜一口　大坂船携登ものなり。
捥　漂到の杉材を伐一頭を火に焼。匃刀にて
刳あけるまて。数回にして成といふ。匃刀ハ、鐵釘を匃磨
して利なるといへり、
盛水槽　すなち馬槽のごとく其造法ハ。捥を
製なる法と畧れなし
盛水桶四面　漂到の竹を以て。木斤を篾し作。
船中に載といふ。
木杓　羹斗　食筋　撥火杖　ハ皆漂到

の木竹を以テ作ると云。
籮　茅を編てこれとなし。大なるハ尺をこり。
小なるハ三五寸。其かたち俗にいふ手篭のごと
し。
燈盞　石を鑿其中を凹にし。油ハ鳥脂なり。燈
心ハ異木皮のいとありと云。
敗研一面　禿筆二枚　墨屑一塊　楮紙
二帖俗にいふ半紙なりと云皆日州船のものの携持たり。これ
荒島第一の珍玩なるへし。遼洋の時紙を剪幣帛
となし。船神を祭といへり。

釣竿。釣綸、鈎　竿ハ漂到の故竹を合接し。綸ハ異木の皮を熟して衣料の鈎ハ故釘を磨して勾曲にし。

筵。薦。　ともに異木皮の綸にて茅を編成

開船の時。筵六扇をのせてとまふねとしたり。

船材　なくて漂到のものなり。あくて呉木にし皆松杉椎樟の属なり。漢船の前に流れきたる

竹ハ。圍三寸なり。長四尋ばかりなりといへり。

艪五張　また櫓字をもちふ。此字音を呼ものなり大坂船携のはるもの四張。日州船とつきえのはるもの。一張なりと云。

布帆一張　嘗て収貯ける衆の衣服を綴て幅四反につくりえたり。其布新古なり。其色に濃淡諸色あり。蓋し浮屠法衣の如くなるべし。

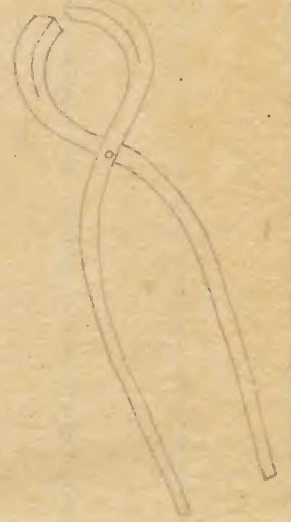
木椗一門　あるひはまた山太郎といふ木勾を縦にし長石を横にくくりたるものなり。今漁舟れほくもちふる所の碇なり。此在島中新に造

槳一把　これハ漂到のものなり
纜二房　挽繂二房　纜ハ圍三寸長十五尋なり。これハ世にいふいかりつなゝり。古歌に搒縄のながきいのちと讀れり。挽繂ハてつなに五六尋程なり。皆異木の皮を熟してこれをつくる。是まくいなしへなといふ搒縄の類なるへし。

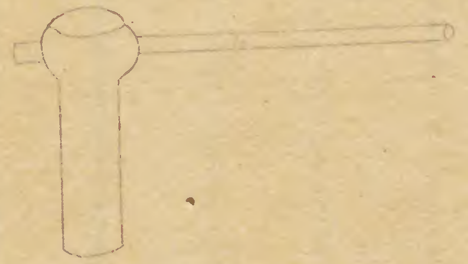
艌船茹　これよく異木皮の索を塡嵌し其滲洩れる所ハ。螺灰泥にてかくむといふ。

洋船一隻　長六尋中間の幅。一尋半なり。杉の材れはよ杉。百六十餘枚を接し。縱橫斜正其尻艘般々一樣ならずして完造なりといふ。蓋し百木の琴のごとくなるへし

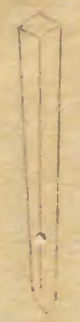
千斤（クギヌキ）



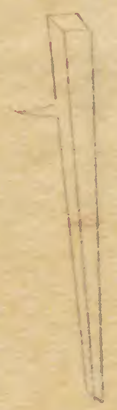
鐵槌（カナヅチ）



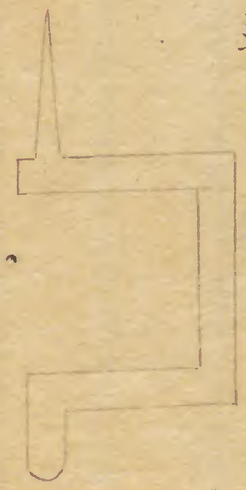
鐵鏨子（テツサンシ）即紮釘



釘鑿（クギノミ）



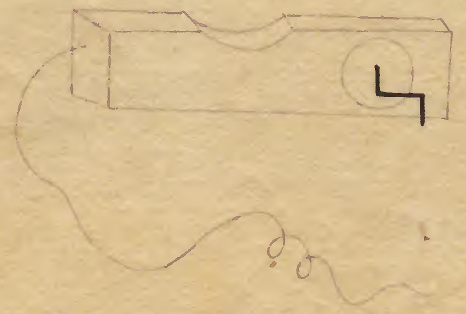
揉錐（モミキリ）



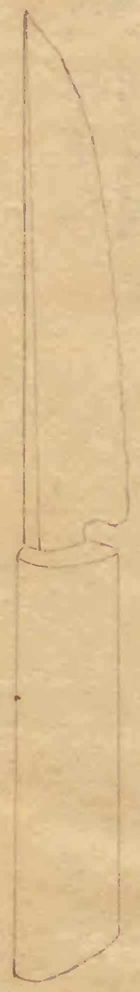
籮（ケ）

木杓（ヒシヤク）

墨壺（スミツボ）

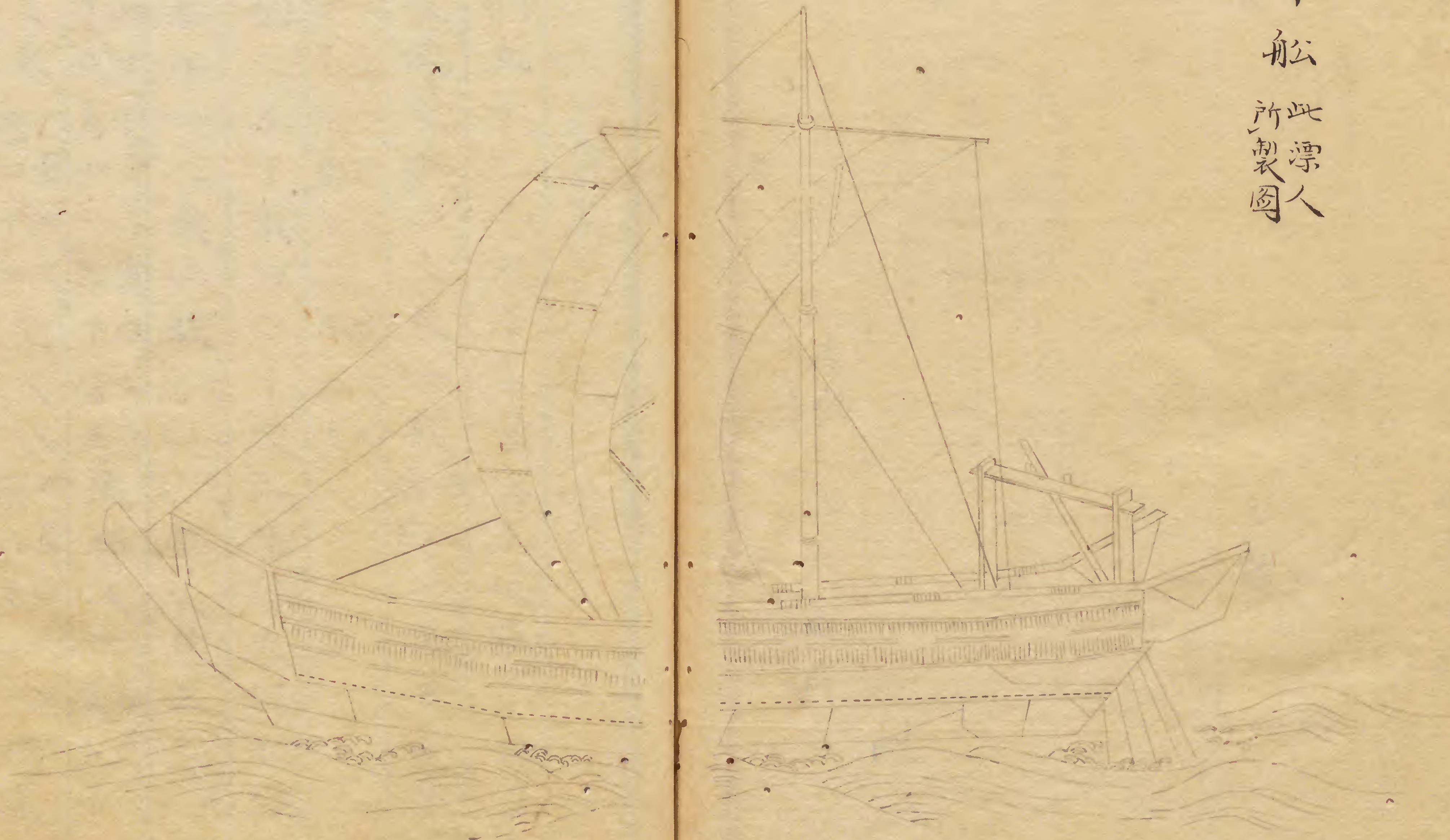


屠刀（ホウトウ）



洋船

此漂人所製圖



国立公文書館
National Archives of Japan

僉名

天明五年乙巳のとし漂落。土佐鏡こほり赤岡浦、
松屋儀七船。四人乗一艘。内三人病死、水手長平。土佐の人、丁巳
歳三十六、ことし寛政九年まて。在島十三年なり、

天明七年丁未のとし漂落。摂津大坂北堀江。亀次
郎船。十一人乗一艘。内二人病死 船長儀三郎肥前鍋島の人。丁巳
歳四十四、今年寛政九年まて、在島十一年。下皆同、織師久七。伊豆の人、歳五十二、水手
市之丞。加賀の人、歳四十四、仝久八。加賀の人、歳三十六、仝吉蔵。江戸深川の人
歳三十六、仝清蔵。出雲の人歳三十五仝松兵衛摂津大坂の人年四十、仝三
之助。奥州南部の人年三十 仝由蔵。越後の人年三十五

寛政元年己酉のとし漂落。日向諸縣郡志布志浦。中山屋三右エ門船。六人乗一艘。内二人病死船長棠右エ門。日向志布志の人、丁巳歳五十三、寛政九年まゝ、在島九年不全織師甚右エ門。日向秋月の人歳五十八、水手重次郎。日向秋月の人、年五十三、仝八五郎。日向志布志の人年三十九、通計十四人ゟ里。

無人嶋談話下巻終

跋

去頃間迷復の者を喧傳せることと。上古の説を聞かさりし。故に封内の漂民を本邦の局中へ招一日其概畧を聞槃。敢てこれを傳ふ其談話を輯録して。此迄各処の紀聞及聞綴書数篇を封考するに。互に前後錯雑して定擬のことあり思ふに漂民既に十載の辛楚を歴て。再我國にかへらしに。いまた郷里を距こと近からぬ。邈爲にして尚五百里外にあれは。喜愁紛綸心神空茫たるへし。蓋晨夕の偶談之

悦爾として自失けるものなり。こゝにお
ゐて本田親孚及槃と相ともに累日彼を招。
毎に豁然として寛語し。其始より反復審問
けること数回。乃其確的著明なることを挙
て綱となし。綱を引て目を擧。かくのごとく
して甲第を綜覈し。類例を区別し槃固より
功を拙に勝ことなく。忙を閑におよびけれ
ふを以て蕪辞陋文。且魚陰の差を追ことなか
れし。ありとも復言半句贅語を修し。唯其
事実を要とけ。却て華を採り実を遺ることの

ならむことを恐るゝあり。一二考証なる
ものは即々其書を援引して。遂に一書とな
し。聊以て異聞を志るして燈下の閑に供け
るのみ。何此を大方の観に廣むるにあらん

寛政九年冬十一月

薩摩侍医曽槃士攷識

無人島談話附録

薩摩侍医　曽槃　識

土州船漂落紀聞

長平ハ土佐のくに赤岡浦の人にして。洋船の運貴を家業となし。時に天明五年乙巳のとし。儀七船の水手にやとハれ。仝浦の源右衛門。外三人。都て五人一船にて。仝國て以浦。及にしきりに。て土州封内の倉米を載仝國田の浦の倉廩え轉送し仝正月晦日に其米苞を収こと畢て船を田の浦へ流されるに。浪あらくして船少破るる

田名にて以浦へ廻棹せんと儀七へことわりける
に。儀七は倉米の収帖を持て上岸し。長平源右エ
門外二人は。空船にて高の浦え停泊せむとて開
帆せしに。全國やふりの口まで凡六里程たりしわ
れ。れも西風烈起浪たゞしく凡三十里計洋のめゝ
へながされ。檝をやぶり。二月朔日辰の刻と思ひ
し比より。北風にかはり。愈励吠浪ことにたけく。
潮水船中に覆まさり。船首を破り船はもち難く。やむ
となく牙檣をきり捨て。一同に髻を薙。諸神に
ちかひ強力をかきりに風波をしのきけれど。方

向も詳ならされば累日風にまかせて漂れるに。全月
十二日と覚れる頃に。風波漸平穏になり。巳の刻
と思ひし頃遥に一島みえたり。いつれの島とも
しらねど。いさゝか停へしと。肝膽にちりため棄よ
ける日とに。翌十三日暁寅の刻ばかりに。小島の
きしにいたり。本船に錨をおろし。脚船にのり移り。
一同に上岸して。身の行方を頼へしと思ひあひ
て。左右を探歩行けるに。人家絶てなしかくまと
ひしうちに。俄に大風起り本船の錨纜も風波にき
ほひ礚湯して遂に断れけり船もあとなく破て

かせになりしかなせんかたなく。尚山の上下、谷の
左右をさまよひ歩行に、人家ハ。更になく。給食ハ元
とよりあるべきやうもなし。船中の食料及火燧
も端船へうつしおくれバ、ミなくなりたる所
になり。日ハかくてくらし。此夜ハ傍然として磯石
を枕に臥しになり、あしたに後島中を見くらし
るに。谷の中央に二三尺四方の洞穴なり。僉商議
して其洞穴を漸鑿して六尺四方計となし。是まで
となりし山中の茅をきり。風雨をしのぎ、えもある
ぬ。磯貝磯草の属をとりて。生にて食し。まゝ谷間に

それハよく栖なる白き鳥あり。人を見てもおそれず。かれを
さをしかけても。そのたけ凡六七尺なり。是を捕
て給養となれり（詳に本篇物産部、食料部にしるせり）及水ハ天水をも
ちふ。其闕ある時ハ潮水をのみてしのぎたる。
源右エ門ハ船中より疝積をわづらひ。仝年九月
と覚ゆる頃むなしくなりぬ。長六も給食のあし
きゆへにや。日々に疲労して。翌年五月と思ふ頃
死なり。甚兵衛もおなじくやまひにて。仝年九月
と思ふ頃うせになり。其三人の骸骨を谷間へ葬
其標識に石を建置たり。遂に長平一人となり。朝

暮に涙のこぼるゝまゝなくかなしみ嘆て生涯の
心もなく五七日も洞中に打臥しけれど。いのち
さえ保なえて日本へかへることもあるべしと思
ひ彼三人の妻子へも漂落の始終も病に死せる
こともかゝるべしまゝ心にこゝろをいさめ前
のごとく磯草鳥以の類をくらひ時に漂到せし
船材の故鐵を拾ことを勾て釣となし。いふかし
き木の皮を剥て絲となし。以の肉を餌となし。魚
類を釣覺たり。此魚は黒鯛に似たり。此まゝ給食
の一助となせり。且漂到以来の衣服は悉襤褸と

なり厳寒の時は彼白き鳥の毛羽を木皮のいと
に綴。身にまとひ四年ほどもそのきれるうちに
大坂北堀江。亀次郎船へよびいれたる

大坂船漂落紀聞

攝津のくに大坂北堀江。亀次郎船一隻。船長儀三郎。外八人。奥州荒濱をさし。天保七年丁未の歳十一月二十七日。空船にて江戸川ヲ開帆シテ。仝二十八日。相模國浦賀の鎮衛にかゝり改正ヲ歴て。仝十二月二日に。仝所を発船し。仝月八日下總のてふ。銚子犬坊が岬(サキ)まてきしりけるに。仝夜戌の刻ばかりに。北風はげしく茫洋(バウヤウ)にはふとき。翌九日西風にかはり。愈励驚濤連山のごとし船中へ瀾(ラン)入し。船いよいよもとゝもちかゝく帆檣を伐(キリ)髻(モトヾリ)を

祈諸神へ誓。各たまのをのあらんかぎりに。こく
きいりし潮水を汲ほとしれと風をいよし
まはしたれしく放洋せらるゝこと幾十里なる
おとをしらず。遂に方向をうしなひ。島山の影更
にみへずなりにけり。かくて五六十日程漂へる
に粒食は空く絶えて、渇を滋潤へき水もつき
て命をわたるへき様もなく風にまかせさえし
まれるに。翌年二月朔日と思ひし頃遥に島影の
見へれきは。みな力を得て。おゝに繋へしと思ひ。
本船に鐵錨をおろし脚船にうつり。其島へいた

り。櫓四張。釜一口。鍋一口。火燧なとたつさへ持て。
登岸せしに。人家多くてなし。但磯邊に長平ある
を望めば。彼は空しくこゝにとしふる由へに髪
をかぶり。癯衰鳥毛を身にまとひ。あやしき姿
なれは。おそろしくおほへ。さえしものいえはし
て見合けるに。長平へ声をかけ。漂落の始終たゝ
たゝのおとを尋ねり長平も漂到以来在島中給
食なく艱難のよしをかたり。互に驚けるうちに
本船脚船ともにあら海の岩木に遮て破られり
ミ不勝をかむとゝもせんかたなく。其船材の散乱

して漂到けるものをいさゝかとり得のミ是をり長平と相量り磯草貝類をとり潮に煮て虚腹を養ひけり此時長平えし先て火食せり。それより長平がありける洞穴をひろげまた別に洞穴をあさへ。先一同に星霜を凌しうちに。五兵衛ハ給食のあしき由為にや。ひさしく病て。全年六月と思ひし頃死たり。忠八も全病にて。翌年六月頃に空しくなりぬ（今按に、五兵衛忠八ハ、日州船漂落の後に死たり、此せつあやまりなり、）其後薩摩のくにのふね漂ひたりける。

島中に遠州船。及江戸宮本善八船といふ。本牌あることをきゝ。今其紀事二條を探索し。きゝみ複をそぬき繁を芟。其意を會し。左方に紀して。まゝ聊異聞を廣むるのミ。

遠州船漂落紀事

遠州荒井筒山五兵衛船一隻。船長佐太夫。水手共九人。また江戸にて水手二人を雇ひ。都て十一人享保四年秋の頃。仙臺荒濵にて官米を載。官吏一人のり副。荒濵を開帆してたしまるに。風あしく下総のくに銚子浦に繋。官吏の命によりて。官

米を上岸に官吏も即こゝより登陸せり。其の浦より空船にて途に開浮の宮にまふでゝ運貨のために枕木を載公所にて権四郎といふものを便船にて又十二人のものにて開船し。仙臺小竹浦へ落帆す。仝年十一月二十六日開帆してたゞし。房州九十九里灘までいたりけるに。仝月晦日暴風大興して放洋せしが波瀾の勢剛強にして。船將にせふさんとすれどもやむことなく遂に牙檣を伐蒙氣のうちに漂流して方向をうしなひ。米水ともに尽て。いのちかぎりと覚へけるに。翌正月二十

六日と思ひし頃。一島を見わたし。本船も鐵錨をおろし。脚船へ釜鍋及船具雑具を載て。其島にいたり載せざるものを携のぼり嶮岸にふねを繋人家をたづぬるに絶てなし。たゞちに谷間に滴の清水あるべしと互に探索するうちに。時うつり本船脚船共に風波に競て破れり。是よりやむとなくかゝるはなれたる島にありて磯草魚鳥などをとりて饑をしのぎける。此島更に淡水なき所なれば小桶にて水を溜て天年をたもちけり。其後枕木流到せしにより。是をとりて鐵釘にて

大孔を凋剜し天水を貯へたる。翌年のとし冬と覚ゆる頃。いつくの船とも知れぬ無人の漂船一隻。磯石に遮破れて。船中の装苞散乱して岩石の間にうちあけたり。みな手に随ひ稲米六七十苞程上岸して。是を洞穴の中へ運送せんとするうちに。驚浪きたりかへる浪につきて。洋中に漂いそれし。其のこりたる二三十苞ばかりを。収蓄て糧米となれり。また其破船より漂いたる。敗帆及船材をとり得たり。此地二十年の久しきに。海上をいたる船をみることなし。

とり得たる。米苞を。日乾すべき所なく苞のまゝに収めり。其うちに粗米一苞ありしを忘れたるのなくて過たるに。翌春の頃。これなることをしり。浸種れるに萌芽を発せしゆゑ。鐵釘の鳶嘴てふものを。鍬の代となし。岩間の土地を相て。一歩あるひは二歩ある所を耕挿秋に登場あり。是は常の給食に充るをさし免蓄て病にあふものあれは粥となしあたへりとなり。按に一説に云。一年と思ふうちに。三熟すとなるせり。時によりて一苞あるひは二苞。あるひは五六升ありといふのみ。

島の周廻一里程もありしやうに覚ゆる。山の高三町計なり。是火山の跡にて嶮岨なり。樹ハ胡頽樹のミあり。茅ハ満山生茂れと。一小の茅屋を結へき材なし。いそ側より一町ほとのほりて。洞穴二ありけるゆゑに。二社にわかち住みたり。薪ハ茅をもちふ。胡頽類ハ郷里にて嫌るれハ。えもちいず。

給食とせし鳥ハ郷里にて見えしことなし。全身白く翼黒く。こゑを左右に開ハ。五六尺あり。其名ハ又とより聞えもなからいぬゆへに。ミつくる大鳥と

唱せり。此鳥人を見ておそれず。捕時ハ杖にて打殺せり。夏の頃三閲月程ハ。何かたへか飛さりける。其間ハ魚を釣て食に充。釣ハ破船の釘を拾石にて鍛釣の形につくり。絲ハ帆絲をぬきもちふ。餌ハ大鳥の肉をもちふ。釣得て潮水に煮。また炙てくらふ。おふ鳥の外。獣類絶てなし。小禽ハありといへと捕得ることをえうず。且其称をしるものなし。後堀江町善八方にありしものいふ。其大鳥ハ南部にてえゝへといふ鳥なりといへり。釜鍋の類。凡二十年のひさしきに破ず。おもふに

専大島を貴べる故。其贈あるによりて多もちゐる欤と覚ゆ。

全船十二人の内。船長佐太夫。水主善三郎。喜三郎。八太夫。権五郎。善右衛門。右六人ハ皆遠州荒井の人なり。南部より武州神奈川まで約し便船せし権次郎ハ豆州岩地村の人なり。以上の七人ハ漂到して三年程ハ存在ありしに其後拾年計の内に連々に死せり。各其歳月を覚ず。其症ハ多老衰のごとくにして。水腫を患死たり。給食のあしき故なるべし。此にいふ人数生死符合せず。誤あるべし。按に一説に云。十一人の内三人ハ此島にありしとぞ。日本へかへるよしなくまゝに餓死せむとす。口れしどて海に没して死たり。残八人の内。五人ハ病に死せりと記。此説なりける。

衣服ハ漂到の時よりして別にたくはひたるものなし。無人の所より漂到せし。布帆及病死のものゝ衣服を衣たり。かく年ふることなれば。尚更に続もあへず。終に大鳥の毛羽を日に晒是を綴て衣たり。冬と覚し頃も暖にして纜縷ひとつにて凌れり。夏ハ涼しく。都て大地より凌より。按

に一説に云。四季の分なく。其中夏と思ひし頃ハ。
いつる日あつく。日本の土用中よりしのきかた
く。朝のうちハ日陰にかくれゐると云々。
在島中。雪降なとなし。つねに雨多く。冬の頃ハ。
時々霙降ける。雷も時々鳴わたることあり。震ハつ
ねに浪の音高にや。其動なとをきゝけれハ。凡二十年
の内。海の静なる時。一度震動なることをきく
なり。

茲歳稲葉の生ゆる頃。甚八。平三郎ハ。其秧田をこ
なりて。仁三郎壱人洞穴にありしに。人々帰り
にきたり。何人にかあれはとたつぬる由為に。かし
る身のゆゑかくしあることを。具にかたりけれハ。
其人まゝいふこなれも江戸堀江町宮本善八船
の者なるか。都合十七人暴風に漂落してこゝに
いたり。今更に水に渇しける由為に。水ある所を
尋ける。いふ是島ハ出水なし。雨に添て多くたひれ
る天水をあたへ。我らを便船して日本へおくり
給へとたのみけるに。其ことを容るゝ由為。さな
磯邊へいさゝ島の有様を説。御船にありける人を。
都て上岸せしめ。まかり御船を率あけけり。船中に

精米一苞ありけれど。閑船の糧にそなへおく。此時ハ未三月二十九日ありしとぞ、今漂落の九の者共に磯草魚鳥をとりて
ひゝふし風便を待ゐたるに公年四月二十七日に順風ありて通計二十人脚船に乗載来の米一苞とあはせて収置たる島生の稲米一二斗ばかりを載せて閑帆せしに。方向詳ならさる故。神籤を決るに戊亥の方を得たり。即其方位をさして昼夜はしらせけるに。公二十八日一島をみわたしけるに。風あしく船向かはらくの落し猶更にそしまれるに。翌五月朔日の西に暮に何てふ島ハしらねども。けふり立のぼりける西に力を得船をとめ。人家をたつぬるに島人に行あひ。島の名をとふに。八丈島なりけり。漂落の島より、八丈島まてしまれる西南、海上の里程も、或ハつゝせ何り、或ハ方向もさらに覚りとあるせり、即其人にみちを請地官に謁し天恩をかうふり即官船にて甚八。己未六十七伊三郎。六十一平三郎。四十二三人帰國せり時に元文四年己未のとし夏五月なり

江戸船漂落紀事

江戸堀江町。宮本善八船一隻。都て十六人。元文三年戊午の年。秋七月。南部をさし交易を慮り江戸川を開帆し。仝年八月十七日南部八戸みなとに停泊し。大豆蕎麦を交易し。仝所にて水手三人を雇。仝年十一月二日に開帆し。仝月十日に仙臺東南浦に下碇し風便をまち。同年十二月朔日に發船して。安房くに。洲の岬まちえしりつるに戊亥の方より剛風俄に起。洋のかたへえふと過ぐるに忽に。相模のくにの地方をとり。帆をおろし流させ

なるに。浪高きのひあくれば。装苞を擲ちのけれど
と。船たゞよひかく。仝月八日に。やむことなくて牙檣
を伐。累日漂流せしうちに。水盡て將に饑に及ばき。
いのちも此程と覚束なくなりぬるに。當未の正月
十二日に一島をみわたし力を得て。帆檣
をつくり。仝日夕暮前に。其島ちかくよせしより。
本船をとゞめて。脚船に乗うつり。人家ありやと
たづぬるうちに。あやなく日はくれにければ。
また本船にかへりけるに。半夜の頃。子丑のころよ
り。風いたくしく起。船は島の岸へ吹よせられ。岈々

たる荒磯なれば。停泊しがたく。やむことなく
て脚船にうつり。風陰にまはりて暗をしのぎ。な
したに本船をかへりみるに。錨纜なくして。行方も
しれずなりにければ。いかにかひなき身の程とおも
ひ其島へのぼり。脚船をかくし。人家及淡水を尋
るに。こゝは無人の島にて。嶄谷間なる一滴の水を
汲。脚船に載。精米五苞あり。されば是をいのち
のねとして。風便を待居たるに。仝年三月十日よ
り。仝月二十五日まで。三里程へだち。五箇の島
山みえしかど皆無人の有様なり。且小島にし猶

更に険岨なれば船をつなぐべき所もなかりし。せ
ちに大地を名にかけたしまれど。まづ水尽て
ものひあくりし仝月二十九日。また一島を見わた
しけるまゝ。はしり繋人家且淡水をたづぬるに。
火山のあとのみにて人家なく屡水をあやしき
洞穴に老人一人ありけり。なき何人と問けるに。
遠州荒井船のものとてなかりしのことを申且
天水を溜置たる由にまづ脚船をかこふつ
とらひ。ともに磯邉にいたり船なる人及船具雑
具脚船を上岸してかこひれる。其船中に精米一

苞ありけるを閑船の為にさくなひ。遠州人と倶
に海草魚鳥をとり存在して仝年四月二十七日。
風便を得て。遠州人三人を便船し。都て二十人脚
船に打乗閑船し。仝年五月朔日に。八丈島へいたる
り。地官の審問を復語し爰書をいたし官船にて
帰國せり。在れる島の周一里程。高三町計と覚れ
る。海上の里程は。八丈島まで凡二百里てあるへ
きなゆ。脚船にてなしけるよしなる由確証なし。方向
もまた何のゆくにありけることを詳にせず。其
兼名は船長畠藏織師武兵衛。水手六助。次郎兵衛。

庄兵衛。六次郎。傳次郎。長兵衛。次郎兵衛。源之丞。宇八。権兵衛。吉十郎。増水手八右衛門。嘉兵衛。門三郎。己之助都て十七人遠州人三人通計二十人なり。

時に元文四年夏五月なり。

無人島談話附録終

明治十五年十月

校合　早川鉄太郎

佐々木恭介

内閣文庫
圖書局文庫

校合　活字　木村　孝
早川鐵太郎
明治十五年十月

国立公文書館
National Archives of Japan